

校区のあゆみ

天伯

豊橋校区史

41

Tenpaku







天伯校区のあゆみ

運動会 平成18年9月10日



夏まつりと運動会



夏まつり 平成18年 8月12日



運動会 平成18年 9月10日



天伯湿原の動植物



3・4月

ショウジョウバカマ



4・5月

ツボスミレ



6・7月

ハッチョウトンボ (メス)



ハッチョウトンボ (オス)



トウカイコモウセンゴケ



6~9月

ツマグロヒョウモン



7・8月

シロバナナガバノイシモチソウ



ミカヅキグサ



ミズギボウシ



サギソウ



9・10月

シラタマホシクサ



10月

スイラン

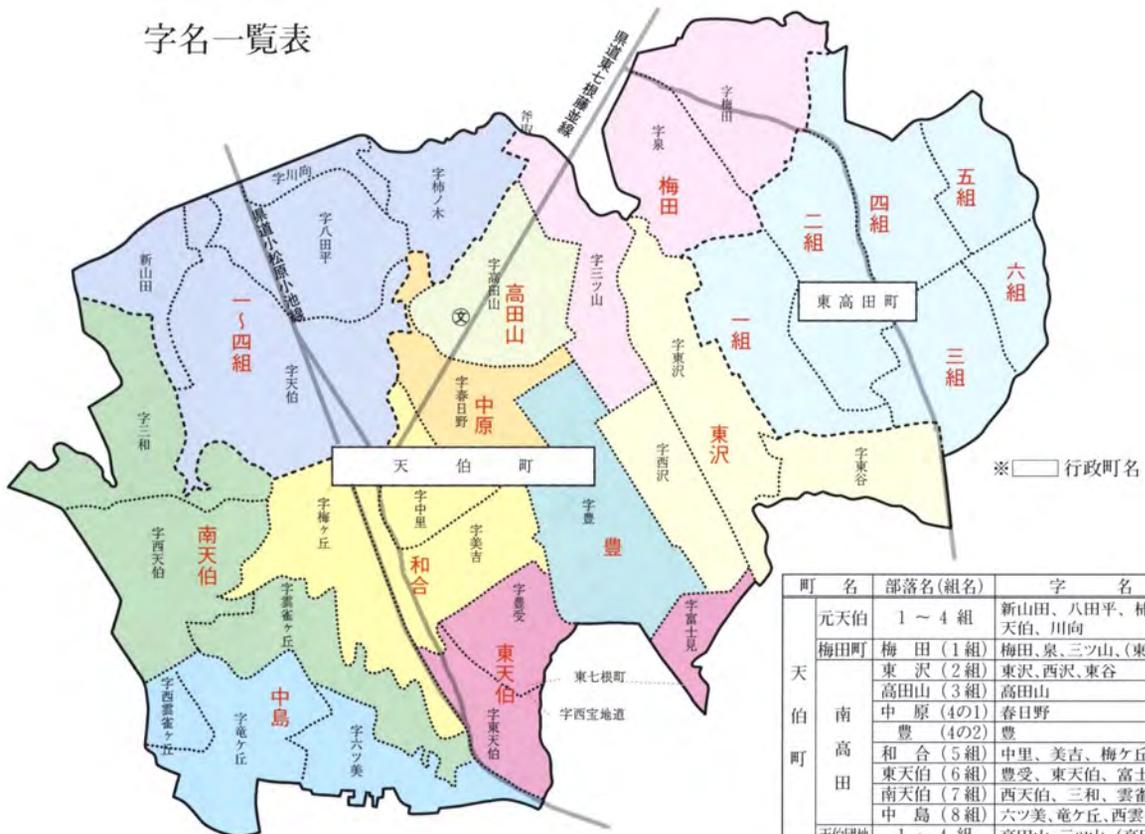


天伯湿原全景



天伯小学校創立50周年記念事業 新校門完成お披露目式 2006年10月10日

字名一覧表



町名	部落名(組名)	字名	
天伯町	元天伯 1～4組	新山田、八田平、柿ノ木、天伯、川向	
	梅田町	梅田 (1組)	梅田、泉、三ツ山、(東沢、東高田)
		東沢 (2組)	東沢、西沢、東谷
	南高田	高田山 (3組)	高田山
		中原 (4の1)	春日野
	天伯町	豊 (4の2)	豊
		和合 (5組)	中里、美吉、梅ヶ丘
		東天伯 (6組)	豊受、東天伯、富士見
		南天伯 (7組)	西天伯、三和、雲雀ヶ丘
	天伯町	中島 (8組)	六ツ美、竜ヶ丘、西雲雀ヶ丘
天伯団地 1～4組		高田山、三ツ山、(高田町字斧取)	
東高田町	1～6組	(なし)	

発刊によせて



平成 18 年度
豊橋市総代会長
西 義 雄

このたび、豊橋市制施行 100 周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100 年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51 校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた 100 周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この 100 周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の 100 年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成 18 年度
天伯校区総代会長
今 井 忠 夫

校区史の発刊にあたり、まず、広陵とした演習地に開拓の鍬を進める中で弛まぬ努力を続け、今日の結実をもたらした先人に改めて敬意を表し、感謝申し上げます。

時代は移り、開拓当時とは比べものにならないほど天伯は変容してきましたが、現在も教育熱心で何事にも力を合わせ、助け合うことができる私達の風土が色あせることはなく、むしろ開拓の伝統に新たな歴史が織り重なり、新しいまちづくりやもの作りの意欲にあふれています。天伯小学校創立 50 周年記念事業や市制施行 100 周年記念の地域イベントが盛大に実施できたのも地域の団結に加え、住民の温かい心と潤いがあってこそ可能なことでした。皆様の善意、熱意、努力に対しこの場をお借りして心からお礼申し上げます。

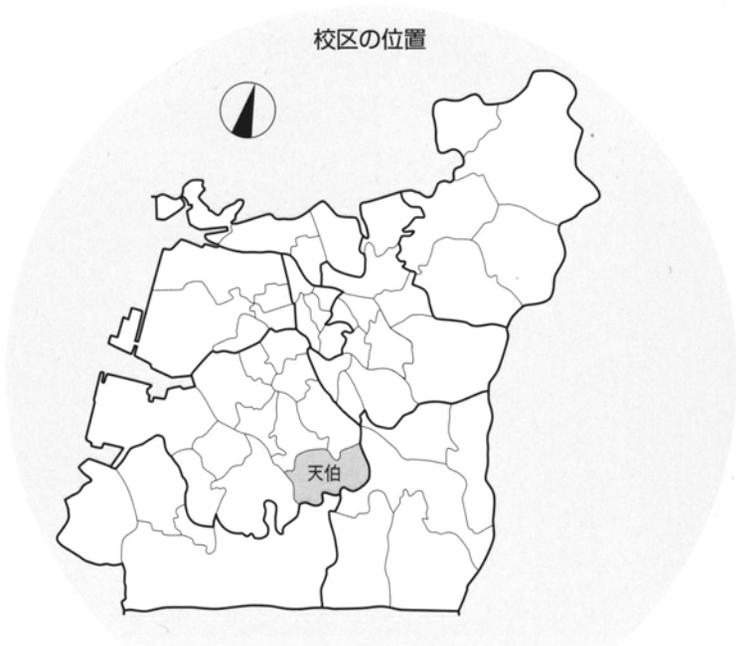
複雑な社会状況の中でこの天伯校区にも様々な問題が生じてきています。これまでも校区、家庭、学校などの連携の下、地域の人材活用や生活の安全・安心確保など種々の課題に取り組んできましたが、時代の要請に応えることのできる地域づくりのためには、今後も一層の取組みが必要です。住みやすい地域を皆様と共に作ってまいりたいと考えておりますので、これからもよろしくご協力をお願い申し上げます。

目次

CONTENTS

天伯校区のあゆみ		
夏まつりと運動会		
天伯湿原の動植物		
新校門の完成お披露目式・字名一覧表		
発刊によせて		
目次		
第1章 自然と環境	7	
1 天伯校区の位置	7	
2 天伯校区の地形	7	
(1) 豊橋市の地形	7	
(2) 天伯原の特徴	8	
(3) 天伯校区の地形	9	
3 天伯校区の気候	9	
4 天伯校区の生物	10	
(1) 植物	10	
(2) 動物	11	
第2章 歴史と生活	15	
1 天伯の歴史	15	
(1) 大昔の天伯	15	
(2) 戦争前の天伯	17	
(3) 陸軍演習場	18	
(4) 戦争後の開拓	19	
(5) 人口の動き	26	
(6) 字および町内会	27	
2 生活	28	
(1) 開拓当時の暮らし	28	
(2) 現在の暮らし	31	
(3) これからの天伯	32	
3 天伯の産業	33	
(1) 農業と畜産業	33	
(2) 農業	33	
(3) 畜産業	36	
4 交通の発達	36	
(1) 道路のようす	36	
(2) 乗り物	37	
第3章 教育と文化	38	
1 教育施設	38	
(1) 小学校	38	
(2) 保育園	40	
(3) 豊橋技術科学大学	40	
2 その他の施設	41	
(1) J A豊橋天伯原支店	41	
(2) 校区市民館	41	
(3) 集会所	42	
(4) 東高田給水所	42	
(5) 消防団とその施設	42	
(6) 寺	42	
(7) 神社	43	
(8) 豊橋開拓記念館	44	
(9) 天伯原開拓30周年記念像	44	
(10) トレーニングセンター	44	
(11) 資源化センター	44	
3 校区の活動	45	
(1) 「八田平川」保護活動	45	
(2) 「天伯湿原」保護活動	46	
(3) 天伯校区夏まつり	46	
天伯校区の歴史	47	
写真で見る天伯	48	
現在の天伯小学校	48	
昔の運動会	49	
天伯団地造成前後	50	
開拓黎明期	51	
編集後記	52	
編集委員	52	
参考文献	52	

表紙 天伯名産のスイカと子どもたち
(平成18年7月17日 伊藤耕三さんのすいか畑)



第1章 自然と環境

1 天伯校区の位置

東三河工業整備特別地域（昭和39年9月16日、国より指定を受ける）の海の玄関にあたる三河港。その三河港に含まれる神野埠頭と、大崎地区との間に流れ込んでいる梅田川をさかのぼると、水田地帯は次第にせばまり、豊橋市南部の広くて大きい台地が見えてくる。左手が、高師原であり、右手が天伯原である。

私たちの天伯小学校校区は、豊橋市の中心街、南松山町を過ぎ、柳生川を超えた小池町で国道259号から分かれて南に向かい、愛知大学の東端を通過して、国宝の多宝塔などで有名な東観音寺のある小松原に通じる道路、通称小松原街道（おんまやばし 県道小松原・小池線）が梅田川にかかる御麿橋を超えたところからである。



旧御麿橋

太平洋戦争が終わる（昭和20年8月）頃までは、陸軍演習場として若者たちが汗を流したこの大地も、今は新しい町に生まれ変わった。畑とビニールハウスが広がる丘、色とりどりの屋根瓦が集まる住宅団地や豊橋技術科学大学の白い大きな建物が見える。

校区の東には二川・二川南校区と、西は野

依・高師校区がある。また、南には高根・小沢の校区が広がり、北は幸校区に続いている。

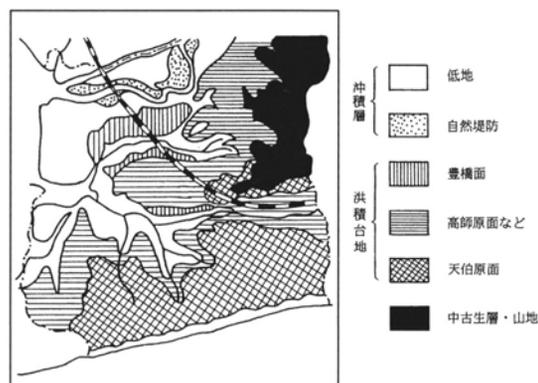
2 天伯校区の地形

(1) 豊橋市の地形

豊橋市の地形を大きく分けると、山地・低地・台地の3つになる。

ア 山地

市の東の方、静岡県との境には、赤石山脈の延長である弓張山地がある。北の方では、300~400メートルくらいの高さがあり、しだいに低くなって南にのび渥美半島まで続いている。これらの山は、結晶片岩や秩父中生層などの変成岩でできていて、そのなかに石巻山を中心にした地域に石灰岩地帯がある。



豊橋の地形

イ 低地

豊川・柳生川・梅田川が運んだ土や砂や石が積もってできた低地（三角州）が市の北西部にある（沖積低地）。三河湾内の浅いところは江戸時代初期から干拓が行われてきた。最も大規模なのが神野新田で約11平方キロメ

ートルもある。

ウ 台地

今からおよそ160万年前から1万年前までの時代（氷河時代）に、やはり川が運んだ土や砂や石が積もり、そこが盛り上がってできた台地（洪積台地）が市街地の大部分と南東方の高師原・天伯原になって広がっている。これらの台地はできた古さによって、さらに天伯原面・高師原面・豊橋面とに分けることができる。

(ア) 天伯原面

天伯原面というのは、1番高く粘土、砂・石などでできた台地である。

岩屋町の付近にもあるが代表的なものが私たちの住んでいる天伯原である。この面は、他の面に比べて最も古くできたため、表面の土や砂・石などの層の中の砂は流されてしまい、小石だけの土地になっているところがあったり、孤立した丘に連なったりしている。しかも、もともと粘土がほとんどない砂と小石だけの層でできているので乾燥している。また、表面が有機物をほとんど含んでいない厚さ1メートルくらいの赤土の層で覆われているところがあり、非常にやせていて酸性が強い。

(イ) 高師原面

西南のほうでは、梅田川から南の大崎・大清水。中央の部分では、南栄・上野・北山一帯と高師原。北の部分では、柳生川の谷をこえて向山・東田・牛川・岩田と、市の区域の

中で最も広く分布しているのが高師原面である。高師原面は天伯原面に比べ、あまり雨にけずられていない若い台地なので平らな面が多く残っていて、高師原のように、ゆるやかな波を打つような平らな原になっている。

(ウ) 豊橋面

最も新しくできた面で、川岸にある段のようになった台地が豊橋面である。吉田城跡、豊橋駅・花田・牟呂と広がっていて、現在の豊橋市街の主要な部分はこの面にある。

川岸の低地（沖積低地）との高さの差が約3～6メートルあり、低地にある湊町・船町・北島町・菰口町などへ下る所はかなり急な坂がある。

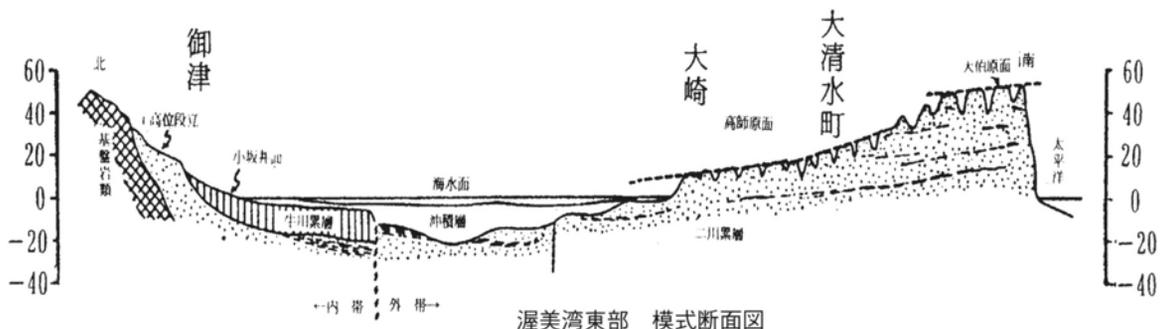
地球の表面は、長い年月の間に、雨や風にけずられたり、でこぼこになったり、また、土地が盛り上がったり沈んだりして、山や谷や平野や台地などができた。

(2) 天伯原の特徴

ア 天伯原

天伯原は、豊川ではなく、天竜川が運んだ土や砂・石でできた土地だと考えられている。それは、高師原には含まれていない小石（川が運んだもの）が天伯原にはたくさん含まれていることや、静岡県^{ちゅうせき}の台地（三方原・磐田原・牧野原・久能山など）の小石と似ていることから考えられる。

また、天伯原台地は南ほど高くなり、最も高いところで標高76メートルに達し、太平洋岸では20～40メートルの急ながけになっている



渥美湾東部 模式断面図

る。一方北西の方は梅田川に向かってしだいに低くなっており、いわゆる逆傾斜の地形をなしている。これは天伯原のもとになっている渥美半島が、長い間に盛り上がり沈んだりしてカマボコの山のように曲げられ、その山の南半分（太平洋側）が現在は波にけずられ、残る半分が北に向かって低くなっていると考えられる。

イ 高師原と天伯原の違い

(ア) 高師原

- ①豊川が運んだ土や砂・石でできた。(粘土質を含んでいるが小石を含んでいない)
- ②標高は20～30メートル。
- ③若い台地で、あまり雨にけずられず平らな面が残っている。
- ④赤土の層の中には少しは有機質が含まれている。

(イ) 天伯原

- ①天竜川が運んだ土や砂・石でできた。(粘土質が含まれていなくて小石が多い)
- ②かなり高く盛り上がった。
- ③古い台地で雨にけずられ、もとの面はほとんど残ってない。
- ④赤土の層の中には、有機質がほとんど含まれていない。

(3) 天伯校区の地形

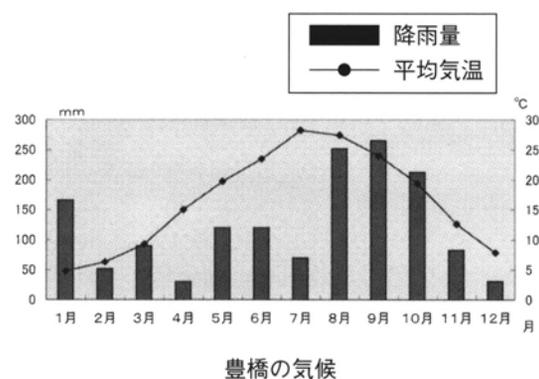
天伯校区は、梅田川とその支流浜田川にはさまれていて、南の方の雲雀が丘・東天伯・豊受・富士見などには、高さ50メートルほどの丘がある。北西に向かって次第に低くなり、梅田川の岸では10メートル以下になる。

坪口川、八田平川（梅田川の支流）などがこの台地をけずり、小さな谷をつくっている。これらの谷のはじまるところには湿地や池ができていて、わずかながら水田が開かれていた。

台地は砂や小石の層でできているのでくずれやすく、川岸や池のまわりなどには砂防林として植えた松林が今も残っている。

3 天伯校区の気候

豊橋地方は、東海地方の気候の代表である。年平均気温が約16℃もあり、農作物に関係の深い霜が降りない日数も210日以上ある。比較的暖かいよい気候といえる。特に、渥美半島の太平洋側は暖かで、天伯の町でも雪が降るのは珍しいことである。



しかし、冬の季節風が強く平均7メートルくらい、強いときには10メートルを越える北西の風が吹く。この風は尾張丘陵や三河高原を越えてくるので、乾燥していて、「本宮おろし」といわれるからっ風になる。しかし、この風は夜、気温が下がるのを防いでいる。それで、冬でも平均気温は5℃以上ある。

冬の北西の風のほかに、春もかなり強い風が吹く。また、8月の終わりから9月にかけては南方から台風がやってきて、強風が吹き荒れることもある。特に、天伯のように小高い台地になったところでは、これらの風をまともに受けるため、ときどき農作物が害を受ける。そこで、高台には防風林として松などを植えて風を防ぐようにし、家のまわりでも屋敷林を育てている。また、作物の植え付けや取り入れなども風のことを考えて工夫されている。

豊橋の1年間の降水量は約1500mmである。6月ごろの梅雨と8・9月ごろの台風時期に多く降る。

4 天伯校区の生物

(1) 植物

ア 身近な草木

家のまわり、校庭のまわり、田んぼ、畑、神社の林、川の近くなど、場所ごとにちがった植物が見つけれられる。それは、それぞれの場所にもっともふさわしい植物が生育しているからである。場所によって、乾燥、多湿、日当たり、土の性質など、いろいろな違いがある。植物は、それぞれの種類ごとに、ふさわしい場所でないとは生育できない。

イ 天伯の湿地の植物

天伯には日当たりのよい湿地が見られた。代表的なものが天伯山神社のとなりにある天伯湿原である。天伯湿原には、よそではあまり見られない珍しい植物や、昔と比べると少なくなっていて絶滅が心配されているような貴重な植物が残されている。

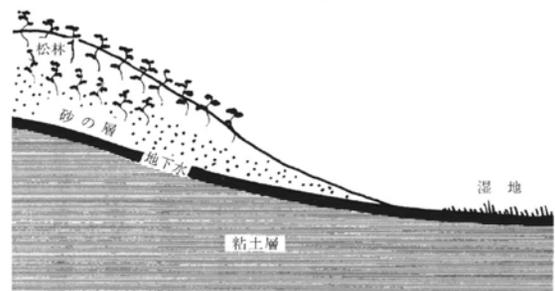
○トウカイコモウセンゴケ 高さが10cmくらいの食虫植物である。葉は根のつけねのところから四方に広がるようにして生えている。葉の上とふちには、赤っぽい色をした小さい毛がたくさん生えている。この毛はねばねばした液体を出し、小さな虫がふれると、くっついて動けなくなってしまう。その後で、虫はこの液体によって溶かされ、栄養分として吸収される。土がうすく、栄養分が少ない湿地でくらすためには、虫をとらえる仕組みが役に立つのである。春になると活動が活発になり、葉を成長させる。

初夏になると細い茎をのぼし始め、6月から8月にかけて花を咲かせる。初めは、茎の先はうずまきのように巻いているが、ピンク色の花をつけるとまっすぐに伸びていく。花の跡には小さな種ができる。秋が深まり寒くなると、葉はちぢんでしおれていく。冬の休みに入るのである。

○シラタマホシクサ 夏の終わりに白い花を咲かせる、湿地を代表する植物である。花が咲く前は細い葉が地面から直接生えている姿で、どれがシラタマホシクサなのかかわりにくいかもしれない。8月から9月にかけて、葉と同じように見える細いくきの先に、白くて丸い花をつけると、とたんに目立つようになる。花は1cmよりも小さい。1つの花のように見えるのは、小さな花の集まりである。花の跡には種ができる。

トウカイコモウセンゴケとシラタマホシクサのほかにも、天伯湿原にはたくさんの植物が生育している。いつまでもこれらの植物が見られるように、湿地を守る方法を考えることが大切である。そのために、湿地のいろいろな生き物に親しみ、よく観察することが最初の一步である。

天伯原には砂や小石でできた地層があり、その下に粘土層などの水を通しにくい層があ



る。上の図のように、しみこんだ水は、水を通しにくい層の上の境目で地下水となって流れる。その水が谷や台地のはずれのがけなどで浸み出して、湿地をつくっている。湿地が保たれるためには、地下水の源にかかわる丘や林が残されていることも大切である。

ウ 昔の天伯原

次のページの地図は、昭和29年(1954年)の天伯原の周辺である。松林と草原や荒地が広がっている様子がわかる。天伯原台地はもともと土地がやせていて乾燥したところである。ほかの木にとっては成育するのがたいへ

その中で、比較的目につくものを場所別にあげてみよう。

○水辺（池・川・水田）の鳥

カルガモは、梅田川で1年中よく見られる。体がこげ茶色で、顔は白っぽく、アヒルくらいの大きさである。

カワセミは、スズメくらいの大きさで、太くて長いくちばしをもっている。頭やつばさは緑色、背にはコバルト色のたてじまがあり胸から腹にかけて赤かっ色をした美しい鳥である。

ケリは、水田で1年中見られるが、春～夏にひなを育てている時はキキッ、キキッとすどく鳴いて、繁殖期にカラスなどに攻撃をしかけることもある。



ケリ

○草原（草むら・畑・水田）の鳥

ウグイスは、冬の間は林の中で静かにえさをついばんでいるが、春先（3月～5月）にはやぶの中で美しくさえずり、夏になると深い山に移動する。

ヒバリは、3月～5月まではよく目につき、畑の中に巣を作っているのを見ることができる。

○林・山の鳥

ヒヨドリは、数多く見られる鳥で、1年中

林の中でピイッ、ピイッ、ピーヨピーヨと鳴きさわいでいる。

コゲラは、キツツキのなかまで、スズメくらいの大きさの鳥である。木の幹をコツコツつつきながら、えさをあさっている。5月頃、ドラミングという、工事現場のような音を立てて木をつついているのを見ることができる。



コゲラ

○人里（家の庭・公園など）の鳥

モズは、1年中見られるが、夏は深い山に行き、9月～11月にかけて人里で、キーキーキチキチキチ……と大きな声で鳴く。このさえずりを「モズの高鳴き」という。また、とったえもの（カエルなど）を小枝やとげにさしておく習性があり、「モズのはやにえ」といわれる。

○通過する鳥

春 ツツドリ

夏 ホトトギス

秋 ツツドリ、サシバ（タカのなかま）

冬 カケス（カラスのなかま）、ウソ、シロハラ、シメ

イ 魚類

梅田川やその支流の八田平川の水は汚れているが、何種類かの魚が生息している。コイやナマズ、ギンブナ、ドジョウ、タナゴ、ウグイ、オイカワなどである。これらの魚は、昔から梅田川や八田平川に生息していたもの

である。一方、メダカやウナギ、タウナギなどのように、昔は普通に見ることができたのに、現在では生息していないか、ほとんど見られなくなったものもある。これらのほかに、最近新たに見られるようになった魚もいる。大穴池のオオクチバス（ブラックバス）やブルーギルは、本来、日本には生息していなかった魚である。このような外国から持ちこまれた魚の中には、もともと日本に生息していた魚や水生昆虫を大量に食べるなどの大きな影響を与えているものがある。これらの魚は、釣りの対象魚や鑑賞魚として日本にやってきたが、マナーを知らない釣り人や無責任な飼い主が川や湖、池や沼に勝手に放したため、日本のいたるところで見られるようになった。

ふだんは見えない水の中の生き物たちも、人間の活動により大きな影響を受けている。

ウ 昆虫

天伯は気候が暖かで、穏やかで、土地の起伏もあまりないため、暖地性の平地に住む昆虫が多く見られる。

○チョウ

よく見られるものには、モンシロチョウ、モンキアゲハ、アオスジアゲハ、ベニシジミ、ルリタテハ、アカタテハ、イチモンジセセリなどがある。

アゲハチョウ科のモンキアゲハは黒地にク



アオスジアゲハ

リーム色の斑があり、アオスジアゲハは美しい青斑がある。

ベニシジミはシジミチョウの仲間で、春は明るいオレンジ色をしているが、夏には黒っぽくなる。春から秋まで、天伯のどこでも見られる身近なチョウである。



ベニシジミ

タテハチョウ科のルリタテハは、成虫で冬を越すチョウである。花には集まらず、樹液やくだものの汁を好む。秋には落ちて腐ったカキの実の汁を吸いに集まってくる。

○ガ

夏の夜は灯火にたくさんの種類が集まる。ガは夜活動するものが多いので、日中はあまり多く見ることはできないが、昼間に活動するガもいる。透明な羽をもったオオスカシバは昼に活動する代表的なガである。

○トンボ

よく見られるものに、ギンヤンマ、シオカラトンボ、アキアカネ、ウスバキトンボなどがあり、天伯の湿地では日本一小さいトンボ、ハッチョウトンボが見られる。

ギンヤンマは体の長さが7.3cmくらいで、日当たりのよい池で見られる。池のまわりをぐるぐると飛び回っているが、これは自分のなわばりをパトロールしているのである。

夏になると、空地にたくさん群れて飛び、めったにとまらない黄色いトンボが多くなる。このトンボの名は、ウスバキトンボである。

お盆の頃に数が多くなることから「盆トンボ」とも呼ばれる。ウスバキトンボは、天伯で最も普通に見られるトンボだが、冬にその姿を見つけることはできない。寒さに弱いため、冬を越すことができずすべて死んでしまうからである。しかし、春になると、沖縄など暖かい地方で生き延びることができたものが、再び子孫を増やしながら日本列島を北上してくる。

ハッチョウトンボは、日本にいるトンボの中で一番小さく、体の長さは1.8cmぐらいしかない。このトンボは、オスとメスで体の色がまったく違う。オスの体はきれいな紅色をしており、メスのほうは黒と黄色のしま模様になっている。羽は、オス・メスともつけ根の部分がだいたい色をしている。5月～8月ごろまで見られる。

ハッチョウトンボは、浸み出てくる水のある湿地にしか生きていけない。昔は豊橋市内のいたるところにハッチョウトンボのすむ湿地があったが、今ではとても少なくなってしまった。天伯湿原はハッチョウトンボの生息地としてとても貴重な場所になりつつある。

○甲虫

カブトムシやクワガタムシなど、かたいヨロイにおおわれた昆虫は甲虫類と呼ばれる。カミキリムシ、テントウムシ、ゾウムシなど甲虫には大変多くの仲間がいる。

クワガタムシは、豊橋市内にはミヤマクワガタ、ノコギリクワガタ、ヒラタクワガタ、コクワガタ、スジクワガタ、ネプトクワガタ、チビクワガタの7種が生息している。このうち、天伯では、ノコギリクワガタ、ヒラタクワガタ、コクワガタを見ることができる。角のように見えるのは、大あごといって口の一部が変化したものである。クワガタムシのオスはこの大あごを武器に樹液やメスをめぐって争う。クワガタムシの幼虫は、広葉樹の朽



ヒラタクワガタ

ち木の中で育つ。種類によって違いがあるが、普通、成虫になるまで2年かかる。

カブトムシの幼虫は、クワガタムシとは違って、堆肥の中で育ち、1年で成虫になる。天伯には堆肥を使う畑が多く、広葉樹の林も多いため、カブトムシが多く住んでいる。幼虫時代の栄養が十分だと、大きく立派な角を持った成虫に、逆に十分なエサがないと角の短い小さな成虫にしかなれない。

○セミ

ニイニゼミ、アブラゼミ、クマゼミ、ツクツクボウシがいる。最近では、クマゼミが多くなり、反対にニイニゼミが少なくなった。セミの仲間は、夏に現れるだけと思われているが、春に出現するものがある。ハルゼミである。ハルゼミは、松林にだけ見られるセミで、5月頃、「ギーコ、ギーコ」といった声で鳴く。昔は天伯にも普通に見られたが、最近ではめったに鳴き声が聞けなくなってしまった。



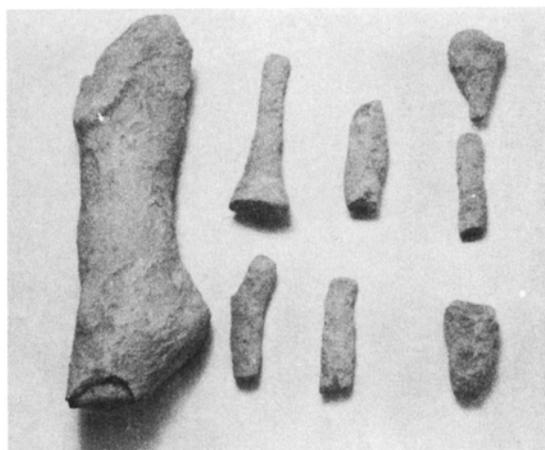
ハルゼミ

第2章 歴史と生活

1 天伯の歴史

(1) 大昔の天伯

高師小僧 高師小僧は高師原・天伯原で多く見つかると、その形がかわいい小僧のようなので、この名で親しまれている。



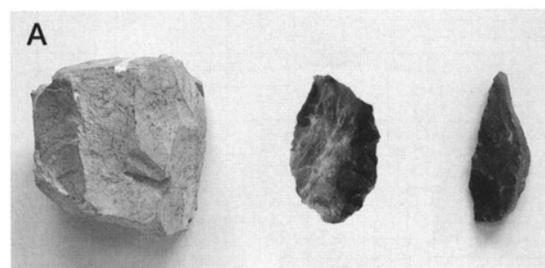
高師小僧

大昔、高師原や天伯原が沼地であった頃、褐鉄鉱が、植物の根のまわりを包むように積み重なってできたものと言われている。中心の根が腐って、ストローのように中が空いたものである。

長さが30cm以上の大きなものから、2cmほどの小さなものまで大きさや形も多様である。球状のものは鈴石といい、また、板状のものは鬼板と呼ばれている。高師小僧は、最近あまり見られなくなってきた。何万年も前の高師原や天伯原の歴史を語るものとして、いつまでも残しておきたいものである。

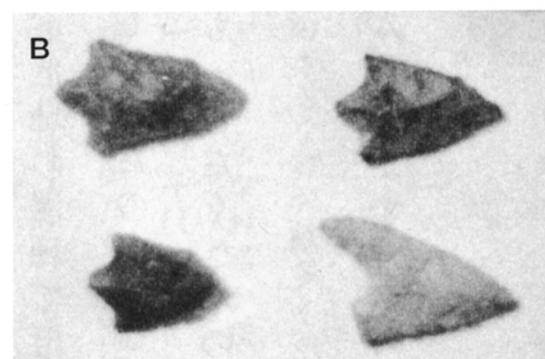
大昔の石器 鉄や銅など金属を使うことを知らなかった大昔の人たちは、鋭い石や硬い動物の角などを材料にして生活の道具を作った。

天伯町字三和にある大穴池の西畑から、後期旧石器時代（13000年前）の人が使っていたと考えられるナイフ形石器（写真A右）が発見されている。写真A中央は尖頭器である。



旧石器

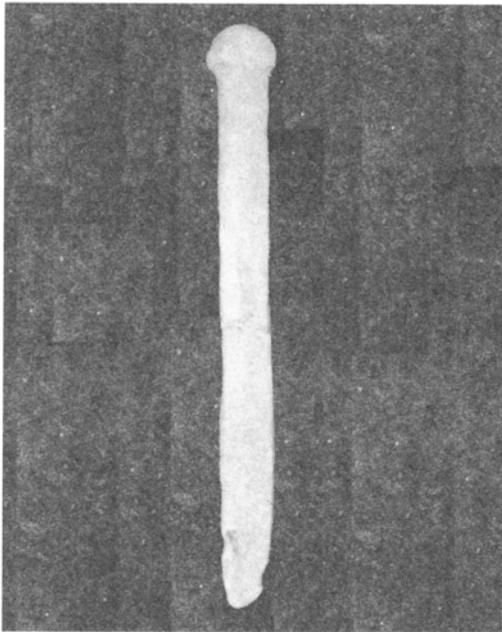
写真A左は石核（せつかく）といって、石器などを作るためにたたき割って、はがしたあとが残っている石である。大穴池の近くには、この他にも縄文時代の石の矢じりなど（写真B）数多くの石器が見つかっている。



矢じり

この辺りは、小高く、土地の高さが28m程もあり、見晴らしのよい所なので、当時の人々にとっては、獲物を捕るためには都合のよい場所だったと思われる。

次ページの写真の石の棒のようなものは、石剣（せっけん）と呼ばれる。これは、天伯校区内から見つかった。今から、2000年以上も前に使われ



石剣

ていたものである。これを持っていた人は、仲間の中心のリーダーのような人であったと考えられる。これだけの形の整った石剣が見つかったのは、たいへん珍しいことである。**古墳** 時代が進んで、鉄の道具が使われるようになると農業も発達し、村も大きくなった。村の中には多くの土地を持ち、人々を指図する人も出てきた。このような人（豪族）は、死ぬと大きな墓に葬られた。この墓を古墳という。大岩町辺りにはチャンチャカ山古墳群・北山古墳群・火打坂古墳群など数多くの古墳が見つまっている。

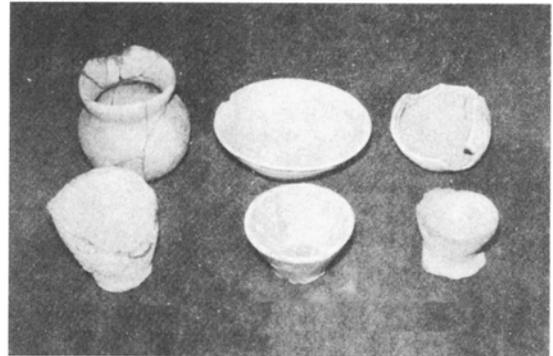
天伯町にも古墳と思われるものが残っている。その場所は、大穴池の西の畑にある「火



火穴

穴』と呼ばれているところである。

この穴の中に入って調べたところ、穴は横にのびており、穴の入口は3つあった。少し前までは、写真で見るように1つだけ穴の入口が残っていたが、今では埋まっている。大切に保存していきたい。



土器

上の写真の左上の器は土器のつぼで、お酒や水などを入れておく小型の入れ物で、この頃作られたものと思われる。

古いかま跡 上の写真中央にあるおわんのようなものは、山茶わんといい、鎌倉時代の食器で多くの人々が日常生活で使っていた。

天伯町字梅田や高田町、そして大穴池の辺りには、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけての古いかま跡が見つまっている。天伯原の丘は窯をほるのに適しており、丘のふもとからわき水が出ている。土器を作るのに具合のいい粘土も多くあった。だから、焼き物を作るのに都合のよい所であった。

作った焼き物は、この地域を治める人に届けられた。たくさんの焼き物は、たいへん重く、人の背や牛や馬の他に、舟も使われたことだろう。梅田川に出入りした舟の数は、1年間に300艘もあったことが、古い書物に記録されている。

伝説—藤助さん— 天伯には、興味ある伝説が残っている。みなさんに紹介しよう。天伯のところどころから素焼きの皿やわんなどが数多く出てきた。これには、次のような言い

伝えがある。

今から800年ほど前、藤助という人が楽焼きの仕方を学びに今の中国へ渡った。ところが、楽焼きに使ううわぐすりや焼き方の秘伝は、なかなか教えてもらうことができなかった。そこで藤助さんは、その家の養子になって2人の子どもまでもうけた。

こうして年月がたち10年以上の真剣な修行のかいがある、ついにその秘伝を知ることができた藤助さんは、日本へ帰ってきた。日本に帰った藤助さんは、楽焼きに適した土を求めて各地を歩いてまわり、とうとうこの天伯の地にやってきた。天伯原は、適度な高低差のある台地で登り窯を作りやすい地形をしている。さらに、わき水の出る沼地も数多くあり、その辺りにはとてもよい粘土があった。そこで、藤助さんは各所に窯を作って焼いた。東高田で3か所、天伯町で2か所ほどこうした窯跡が発見され、素焼のわんや皿などが多く見つかっている。西天伯の沢島さんの温室のある畑のところは、その窯跡の1つで、近くの池（現在は埋め立てられた豊橋技術科学大学敷地内）には、よい粘土があり、それを焼き物に使ったのではないかと考えられる。藤助さんは、前に書いてある「火穴」に住みついて楽焼きをしたのではないかといわれている。その後、藤助さんはさらによりよい土を求めて、知多の緒川へ行ったり、瀬戸へ行ったりして焼き物の技術を伝えた。今の瀬戸焼のもとを作ったといわれている。緒川にも窯跡が数多くあって、うわ葉をかけたすばらしい焼き物の破片が見つかり貴重なものとして扱われている。（畑ヶ田町の森次郎さんから聞いた話より）

(2) 戦争前の天伯

梅田川と水田 元天伯または天伯町と呼ばれているところは、天伯町のうち、字八田平・字柿ノ木・字天伯・字川向であり、ここは戦

前から開かれていたところである。

高師原と天伯原を分けている梅田川は、愛知県と静岡県の県境から流れ出し、北の山々から流れ出した水と、広大な高師・天伯原台地に降る雨水を集めて渥美湾に向かって東から西に流れている。野依の東で、天伯原を流れる支流、浜田川が合流し、さらに、野依の西では支流、西の川が合流して大崎の北で海に流れこんでいる。

これらの川の両岸には水田が開かれており、天伯原台地のところどころには、自然のわき水もあり湿地や沼もあった。ため池の水としても利用していたようだ。

神領 平安時代（794年～1185年）になると、三河にも荘園（貴族や寺、神社の土地）ができてきた。三河は伊勢神宮の神領（神社の土地）の多いところであり、とくに渥美半島は昔から伊勢とのつながりが深く、平安時代の末には渥美郡内のほとんどの耕地は神領になっていたようだ。

「**神鳳鈔**」という本に、高足（高師）御厨・野依御厨などという名前が見られる。小松原街道の、梅田川にかかる御厨橋は、「おうまやばし」だが、「御厨橋」という字が使われていた。これらのことから、梅田川の両岸は、そうとう早くから開かれていたのではないかと考えられる。天伯校区で早くから水田が開かれていたところは坪口川や八田平川にそった低い土地と大穴池の北の辺りと思われる。

西七根宝地道 梅田川の支流である浜田川は、天伯校区の南の端を流れているが、この川に沿った低い土地にも水田が開かれている。とくに、校区南の端の宝地道は、天伯原台地が浜田川に削られ、日当たりのよい南向きの斜面になっていて、明治のころから10軒くらいの農家があった。

豊橋の発展と天伯原 豊川の河口近く渡津付近は、船着き場であった。この辺りに人々が

多く住みつくようになり、今橋という部落ができた。戦国時代の今橋城・江戸時代の吉田城の城下町となって次第に発展してきた。

明治になって吉田藩はなくなり小さな町村に分かれた。明治18年歩兵第18連隊が現在の豊橋公園に駐屯した。

また、明治21年に東海道本線豊橋停車場(駅)が完成すると交通の便がよくなった豊橋は、東三河の中心として発展するようになった。

明治22年渥美郡豊橋町が誕生し、その後、明治39年豊橋市になった。

この頃の天伯は、愛知県三河国渥美郡高師村の一部であった。川の近くは一部植林されているところもあったが、大部分はかん木がはえている荒れ地だった。

(3) 陸軍演習場

第15師団 日露戦争中に満州(現在の中国の北東部)で編成された第15師団は、戦争後、東海道本線に沿った所に置かれることになった。

明治39年7月15日内務省告示により花田村と豊岡村を合併し、8月1日全国で62番目の市になったばかりの豊橋は、師団を置くことによって繁栄を試みた。他の都市も師団を置いてもらおうと競争していたが、高師原と天伯原があることで、明治40年3月21日、豊橋に第15師団が置かれることが決まった。そして明治41年11月16日に師団開庁式を行い正式に発足した。高師原と天伯原は、日本の中でも名高い陸軍の大演習場になったのである。師団の司令部やたくさんの連隊が置かれた高師村は、多くの店や宿屋などができ急速に発展した。

演習場としての天伯原 演習場になると、高師原には馬を使う部隊が多く置かれたので、給水飲馬場や演習のために兵隊の宿営する廠舎しょうしゃもいく棟か並ぶようになった。

天伯原にも軍道ができ、橋がかけられた。目標物にするために、51高地とか雷松とか、高田山高地などという名前がつけられた。雷松というのは、現在の東高田町の給水所のところにあった、大きな松の木だそうだ。

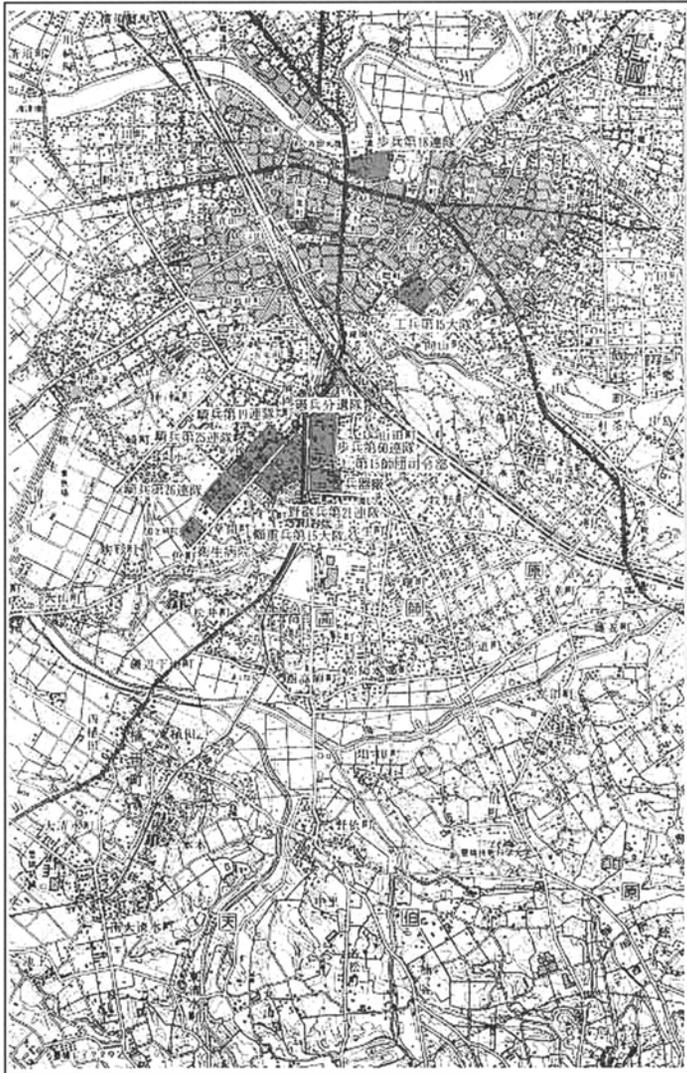


演習写真

演習場のころの農家 第15師団ができて、多くの兵隊が豊橋に住むようになり、豊橋市は繁栄した。しかし、演習地の中に田や畑のある農家の人たちは大変困った。大演習のあるときはもちろん、ふだんでも射撃のある時は、小松原街道や東七根・藤並線にくさが張り、通行禁止となってしまった。自分のうちの田や畑でも、そこへ行くことができず、田植えも水引も桑つみもできなかった。演習場の真ん中に住んでいた宝地道の人たちは、引越しをしなければならず、10軒のうち5軒の人たちは高田町(幸校区)へ移ったのである。

第15師団が廃止されてからのことだが、天伯原にある高師村・高豊村・二川町の人たちは、大正14年5月に「射撃時間をはっきりすること・農繁期には演習をしないこと」を要求した。師団側(第3師団)は、「今までの損害補償として5万円払うこと、これからは1回の演習で400円払うこと」を約束した。しかしその後、農民が1回の演習で1000円払ってくれるよう要求したために、話し合いがまとまらなかった。

一方、神野新田や牟呂などの農家の人たちは、軍隊の馬ふんや敷きわらを払い下げても



豊橋の軍隊（第15師団）

らって、土地を肥やした。神野新田などから越してきた人たちが住むようになり、大正3年には、元天伯にも農家が増えてきた。

○毎日大八車で野菜を売りに行き、帰りには車にチリを積んできて畑に入れました。また、朝食前に軍隊の米かし水を大八車で毎日取りに行き、畑に入れたりしました。

（大正13年入植 天伯 黒野吉巳氏）

○私が来た時は、戸数18戸で、畑は陸軍の拝借地で、年貢は1反歩（10アール）80銭でした。冬になると2・7の日、月6日は天伯原の下草（松を除く草木）を切ってきて、年中くべるまきをたくわえたものです。何年目か

に1回松くい虫に食われた松が払い下げられ、村中出て伐採し束にして売り、おひまちをしたりしました。

（大正13年入植 天伯 野口益男氏）

軍縮 大正14年4月、軍備を少なくし、また近代的な軍隊にかえるため、第15師団は廃止された。しかし高師地区の兵営は、そのまま残った。騎兵旅団（後に満州へ移った）、新しく置かれるようになった高射砲連隊、つづいて陸軍教導学校、予備士官学校、陸軍病院、廠舎などになった。そして、高師原・天伯原は第73師団（怒部隊・本土防衛軍）の配置まで軍の演習地として、昭和20年の終戦まで続いた。

（4）戦争後の開拓

開拓のくわ入れ 戦時中、軍隊が食糧増産のために農耕隊を作った。その農耕隊は、南栄・北山・岩西などで耕作したが、戦争が終わると、豊橋にいた部隊は解散になり、軍人たちは明日からの食べ物を心配しなければならなくなった。農耕隊が耕作していた土地を分配したり、演習地を競争で開墾したり

りした。軍隊から払い下げてもらった馬を使って開墾した人もいたが、くわやスコップだけを頼りに開墾を始めた人もいた。

開拓増産隊 戦争が終わると、外地にいた軍人や、外地で働いていた人たちがどんどん内地に引き上げてきた。戦争中は兵器を作ることに力を入れていたので、食料が豊かではなかったうえ、大勢の人たちが引き上げてきたので、日本は食料不足になった。何とか食べ物を増やさなければというので、政府は昭和20年11月、国の事業として開拓増産隊を募集した。

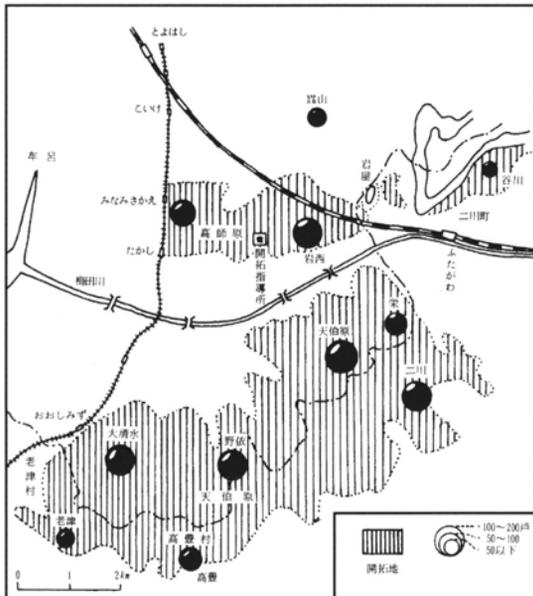
高師原・天伯原などだけでも荒れたままの野原が3000ヘクタールもあった。せまい日本

でこんなに広い土地をあそばせておくことはもったいないと、これらの土地を開墾しようとしたのである。

軍人だった人や、戦争のために家を焼かれてしまった人、外地から引き上げてきた人たちが応募した。天伯にも、国の募集で県外から来た人・県の募集で他の都市から来た人・豊橋市の募集で集まった市内の人などが集まった。

豊橋市内の開拓地 開拓増産隊の最初の応募者は500名ほどで岡崎の追進農場で1か月、大清水・老津・高師の兵舎で2か月の訓練を受け、共同生活をしながら入植予定地の開墾に通った。昭和21年1月には、あとからの応募者を合わせて1000世帯を越すほどになり、いくつかの班に分かれて開墾を始めた。

天伯町の開拓 天伯町の官有地に入植した人たちは、もと軍人だった人と、県の事務所や市役所などを通じて天伯の開拓を希望し、単身で大清水にあった廠舎に入って開拓技術を学んだ人たちである。大清水の廠舎は5つの寮に分かれており、名古屋市の人、名古屋市以外の人、郡部の人、豊橋の人というように、だいたい郷土別に入寮していた。



旧軍用地の開拓農場分布

昭和21年11月から1か月間の訓練を受けた。昭和21年1月5日、農業開発営団豊橋事務所の指導のもとに、1戸につき8反から1町歩(約0.8から1.0ヘクタール)の開墾地の仮分配を受けた。訓練期間が過ぎても、この人たちには住む家が無く、廠舎にそのまま住んでいた。そこから天伯までやってきて開墾したということである。この人たちは、梅田・東沢・高田山・豊・和合・東天伯・南天伯・中島の8つの組(農場)に分かれて開墾を進めており、これらの名前も集まった人たちの話し合いでつけられたものが多いようである。

組名(農場名)の由来

- 梅田 梅田川から最も近いから。
- 東沢 沢(坪口川)の東側だったから。
- 高田山 高田山が近くにあったから。
- 中原 中央部で平たんな野原があったから。
- 豊 豊かな生活を望んで
- 和合 仲良く和やかに暮らしていきたいから。
- 東天伯 天伯町の東の部分だったから
- 南天伯 天伯町の南の部分だったから
- 中島 尾張の中島郡出身の者が多かった。

あざ 字名の由来 天伯校区にも、いろいろな字名がある。もともと軍用地であったので、字名のないところがほとんどであった。例えば、元天伯以外は、天伯町1番地といわれていたときがあった。

では、その他の字名はどのようにしてつけられたのだろうか。

- 泉 泉があって、飲料水としていたから。
- 西沢 沢(坪口川)の西側だったから。
- 春日野 春日井郡出身者が多い。
- 梅ヶ丘 やせ地であったので、ロマンをもとめて名づけた。
- 雲雀ヶ丘 天伯でもっとも高地であり、ヒ

- バリの巣が多かった。
- 豊受 豊受神社がある（伊勢の外宮・天伯山神社のこと）。
- 富士見 富士山が見える。
- 三ツ山 三つの山に囲まれていたから（高田山ほか）。
- 竜ヶ丘 竜ヶ池（技科大造成のとき埋めた）があったから。

梅田・東沢・高田山などには、もと軍人だった人たちが多く、和合には、豊橋にいて応募した人たち、南天伯には、名古屋方面の県内から応募した人たち、中島には、愛知県中島郡からの人たちなどが多く集まっていた。

何年もの間、開拓されないうでいた天伯原。陸軍演習場ということもあったが、「渥美の不良土」と呼ばれるこの土は、酸性が強く、肥料分を殆ど含んでいない赤土で、しかも砂礫層で水はすぐしみこんでしまうという悪条件のために、開拓が行われなかったのである。「やっとの思いで開墾した畑に麦をまいても、収穫は何もなかった」というありさまだった。

「何よりもまず地力をつけなければならない」というので、夜の2時・3時に起きて、手製の荷車を引いて町まで行き、ごみを集める競争が始まった。

収穫が少ないので食べ物を節約しなければならず、開墾をしなければ作物を作ることができないので、栄養失調になってしまった人も大勢いた。昭和21年の暮れまでに、高師原・天伯原で81人もの人が開墾をあきらめてほかの土地へ移っていった。

昭和22年度には営農資金として、政府から1戸あたり1万円が貸しだされた。昭和46年現在、天伯町に住んでいる人で、昭和20年の入植者は、60戸、21年は29戸となっている。入植した当時の様子を人々は次のように話している。

○私たちが天伯に来たときには高田から今の

和合のバス停までに、7・8軒しかなく、ランプの生活を1年半くらいしました。県道も雨が降れば歩けないくらいぬかるみ、原野の中に兵隊さんの歩いた道がわずかにある程度でした。畑は何もなく、塹壕^{さんごう}だけがあちこちにある状態でした。半年ほどして2次に入ってくる方がぼつぼつあり、家もふえてきました。

（5組 柿原春次氏）

○私が入植した当時、今の天伯（旧村）の入り口にくさりがあって、時間を決めて通行が許されました。月夜などあばら家の周りにうさぎがとびまわり、父と落とし穴を作って生けどりをしようとしたがとれなかった。など、数々の苦しいが楽しい思い出があります。

（7組 荒井金次郎氏）

○私の兵隊時代（昭和6～7年頃）名古屋から2度演習に来た時と、昭和20年に入植した時とは同じようでした。小松が一面にあり、ずっと広々とした原でした。

（7組 林 芳弘氏）

○南天伯農場は入植当時22戸ありましたが、転出して行かれた方は約5割強で、残っている方は5割に足らなくなりました。開拓に見切りを付けて天伯をあとに他地方へ行かれた方、あとから転入した方が多い今では、農業以外の方を合わせますと、28戸あります。入植当時は食糧難であり、やせ地を耕しても食料はとれず、4人の子どもをかかえて苦労の連続で、夜は買い出しに行くのが仕事でした。入植後5年ほどたってからようやく電灯がつき、その時は、本当にうれしかったです。

（7組 青木新吾氏）

○民生委員をしていて、当時生活が苦しいため民生にかかる人が多く、夜カンテラの光で書類を書き、バスがないため市役所へ行くのに半日、場合によって1日近くかかってしまうことがありました。家の仕事が遅れ生活が

苦しかったけど、父はそれでも人のためになるのだからと喜んでがんばっていました。

(4の1 手島 弘氏)

○最初二川の町に着いたときは夜でした。3人の子どもを抱えて車で朝を迎えました。明るくなるのを待って山を探しに藤並を通り、1番高いところをめがけて上ってきたときのことを思えば涙です。笹ばかりの地、また、笹さえ生えていない赤土の所もありました。草が生えてくればこの土地も一人前だとも言っていました。毎日の開墾でずいぶん蛇を殺しました。今ではすっかり昔のおもかげはありません。

(2組 林 芳郎氏)

○初めは手開墾をしましたが、食料不足で思うようにできませんでした。妻は毎日買い出しが仕事でした。そのうちにトラクターでおこしてくれるようになりましたが、根ぶるいをしなければ作付けはできず、やっと根ぶるいをした少しばかりのところへさしたさつまいもは、秋になってみると、「はつかねずみ」から「筆の穂」くらいでした。

(7組 鳴沢春男氏)

東高田町の開拓 昭和22年4月、愛知県では、開拓者のために開拓基地農場（開拓指導所）をつくり、6月末に第1期生（30名）の入所式を行った。木造の事務所1棟と寄宿舎ができ、12月まで講習が行われた。その間に実習として指導所の農場開墾が行われ、スイカなども作られた。

1期生の中で1部の人々が、昭和23年1月10日から3月まで、豊橋市高田町官有地で現地講習を受けた。30名くらいを1単位として基地部落とし、現地に作業所を建て、講習生たちは合宿して開墾を行った。

第1次15名、第2次12名、第3次10名、第5次9名と、年々入植した。第4次の13名だけは、営林署の職員であったので特別の扱い

を受けたが、他の人たちは1年間の講習後に東高田町に入植をした。

第1次から第5次までに入植した59戸の農家は、基地農場の指導でいろいろなことを実験的に試した。

昭和28年に計画した畑のかんがいもその1つで当時のお金で1200万円もかけて井戸を掘り、畑に水を引こうとしたが、途中で水がもれてしまい失敗に終わった。1戸あたり10万円もの借金は大変な痛手であった。この井戸は100m以上もの深さがあり、現在は飲料水用の水道の水源として使われている。また、昭和26年から30年にかけて、三河湾から吹きつける冬の強い季節風（空っ風）を防ぐためと、お金のもらえる仕事になるため防風林を作ることになった。防風林は、幅が5間（約9m）あり、南北に植林をし、東西におおよそ500mおきに3本の防風林を作った。



防風林

写真は、今も残る東はずれの防風林である。木は、50年以上たちこまで大きく育った。防風林は、農業技術も進み家屋も本格的な建て方になってきた現在では、ほとんど必要性がなくなってきたが、押し寄せる都市化の波の中で、自然の緑として残しておきたい大切な財産である。

優良開拓村として表彰された栄農場の入植者は、戦災者40%、復員者20%、外地からの引揚者（帰国者）10%、その他7%という状況であったが、全入植戸数59戸中、わずかに

日六十二月五年一十二和昭 (中部新聞) (二)

就農開拓団のその後

昭和二十三年五月十七日の開拓地に入植した開拓農家のその後、現在どうなっているか、その実情を調査した。以下にその概況を述べる。

農機具さへ買へぬ 肥料と資金に悩み深刻

開拓農家の生活は、開拓地に入植してからは、農機具の購入に悩んでいる。肥料と資金に悩み、深刻な状態にある。開拓地に入植した農家は、開拓地に入植してからは、農機具の購入に悩んでいる。肥料と資金に悩み、深刻な状態にある。

教壇復帰は卅九名 追放教員は六百余

開拓地に入植した農家は、開拓地に入植してからは、農機具の購入に悩んでいる。肥料と資金に悩み、深刻な状態にある。開拓地に入植した農家は、開拓地に入植してからは、農機具の購入に悩んでいる。肥料と資金に悩み、深刻な状態にある。



【くに新聞】—タクラトるす躍活

中部日本新聞 昭和21年5月26日(上)・6月17日(下)

2戸の落伍者をだしたただけであった。

入植当時の人たちは、同じ開拓小屋で寝食をともにし、経費や作業など、すべてを共同でやった農場もあった。その後、それぞれ独立して自分の家を建てて分かれたが、農協中心の農業経営は今も続いている。

○昭和23年現地入植、からっ風にふかれて開墾し、かんしょを作り、初めて収穫したときの喜びは今も忘れられません。

(23年入植者 東高田 長坂 猛氏)

○1年間の開拓基地農場の講習を受けた。栄地区第1次入植者15名が東高田町(当時高田町官有地)最初の住民となった。食糧難のな

かで苦しい共同生活を営みながら、栄開拓農協を設立した。

(23年入植 東高田 梶野賢二氏)

○第3期基地農場卒業生10名は全員長野県下伊那郡阿南町出身で、小生の46歳から16歳までおり、世帯持ちも3戸あり、これが最初から完全な共同経営を2年間行いました。サイレンを合図に全員起床、食前事業をはじめすべて共同作業でした。毎月1日と15日を公休日にしていました。毎月のこづかい銭も1人300円ときめてありました。3年目におのおのの住宅を建て、井戸を掘り、土地を分けて個人経営になりました。

(25年入植 東高田 佐々木一二氏)

組合の設立 終戦直後の自由開墾から国の計画的開墾に編入され、計画の約50%が3年間で開墾された。開墾された畑には、サツマイモ・ジャガイモ・麦などが作られたが、それは自分の家で食べるだけでも足らず、農業による収入は無しというありさまであった。

近代的な農業を進めるためには、道路を作り、排水路を通すこと、農業技術の改善や畜力の活用、農村の電化、商品価値のある作物を作ることなど、共同で開発しなければならない問題が山ほどあった。

そこで、開拓農家の人々は、それぞれの地域ごとに協力して、開拓農業協同組合を作った。**天伯原開拓農業協同組合** 天伯原官有地に入植した人たちは昭和23年5月17日、177人が組合員となり、関係官庁に天伯原農業協同組合設立認可申請書を出し、6月10日に認可された。

この組合は、豊橋の開拓農協12の中でも、組合員の最も多い大きな組合であった。新しく仲間に入ってきたりする人もあって、何年間もほとんど変わらない組合員数が続いた。

行き悩む軍用地開墾 現地報告

軍用地の開墾は、開拓農家の生活に大きな影響を及ぼしている。開拓農家は、軍用地の開墾に悩んでいる。開拓農家は、軍用地の開墾に悩んでいる。開拓農家は、軍用地の開墾に悩んでいる。

やせ地に流汗空し

脱税組の出たふみ止まる戦災者。やせ地に流汗空し。脱税組の出たふみ止まる戦災者。やせ地に流汗空し。脱税組の出たふみ止まる戦災者。

栄開拓農業協同組合 高田町官有地に入植した第1期の人たちは、栄就農組合を作った。それが第5期までの59戸で栄開拓農業協同組合になったのである。これらの2つの組合は、昭和47年7月1日、豊橋市開拓農業協同組合として合併した。そして、それぞれ天伯原支所、栄支所となった。

開拓農業協同組合

組合別戸数 (1952年)

高師	95戸	岩西	172戸
天伯原	177戸	野依	107戸
大清水	131戸	栄	59戸
高山	26戸	二川	133戸
谷川	16戸	高豊	83戸
老津	20戸	一里山	15戸
計	1,034戸		

台風 天伯原官有地・高田町官有地にバラックが建ち、部落ができ、農協や学校などの立派な建物もできて、天伯町・東高田町となった。

しかし、昭和28年9月25日、豊橋地方を襲った台風13号のため、天伯町だけでも家屋全壊35戸、半壊56戸、大破62戸と大変な災害を受けた。苦しい生活の中での災害はどんなに痛手だっただろう。でも町の人たちはこれに負けず、国の援助などもあり家を建て替えた。昭和60年頃までは、この時立て替えた家が多かったようだ。今、住んでいる家はその後建て替えられた新しい家がほとんどである。

昭和34年9月26日には、伊勢湾台風に襲われた。当時の作文からそのときの様子が想像できる。

「伊勢湾台風」天伯小学校 上坂 登

あの、伊勢湾台風を思い出してもゾーッとする。9月26日の夕方6時ごろ電気が消えた。その後雨風はますます強くなってきた。僕たちは真夜中の12時ごろまで起きていたが、そのころは瓦が飛ぶやら、トタンが飛んで家の中はガタガタするし、雨はもるし、家の中は

大きすぎだった。午前3時ごろになってやっと雨風はおさまったので兄さんといっしょに外へ出たら、ちょうど東沢の越立さんが自転車に来て、

「オーイどうだ、だいじょうぶか」

と言うと兄さんは、

「ああ、だいじょうぶだ」

と答えた。雨風がおさまったので、それから6時ごろまで寝た。明るくなったので起きてみると、最初に富田さんの家が倒れているのに気がついた。自転車に乗って学校のほうへ行ってみた。あちらこちらで電線が切れたり、家が倒れたりして、見るも無残な姿になっていた。お寺の向かいの家から親豚と仔豚が一緒になって、ゾロゾロと道の方へ走ってきた。追い返してやるとブウブウと鳴きながら走ってまたもどっていった。

学校へ行ったら廊下は持ち上がり、教室の戸だなが開かなくなっていた。朝会のときに今の中学1年の杉森君が死んだということ話を話してくれた。その後、杉森君の友達みんなでお墓参りしたことは今でも頭に焼き付いている。

今では、もう家はすっかり立ち直って、みんなの顔もすっかり明るくなっている。ぼくは、二度とあんなおそろしいことは起こらないよう願う。

一開拓地の子供たち 小学生・中学生の作文集 昭和36・3 愛知県農地開拓課編一

水を得る努力 天伯では以前から水が得にくく、古くから住んでいた約20戸の八田平の人たちも、昭和の初めまで「こまいさんの井戸」(天伯神社近くにあった)と呼ばれるわき水を利用していった。

昭和20年頃から天伯には次々と多くの開拓者が入植し、原野を開墾していった。その当時の人々は、生活になくはならない水を得るためにたいへん苦勞をした。

八田平川・坪口川などの川の水はたいへんきれいだったので、川の近くの家ではこの水をくんで飲み水として利用していた。また梅田川の水も、洗濯をはじめ、農作物の大根・人参など野菜を洗ったりするのに大いに利用していた。近くに川のない家では、わき水を利用した。土地の低い湿地に穴をほり、そこに細かい砂を敷きつめ、水場を設けた。しかし晴天の日が続くと水が渴れ、大雨の後には水がにごったりして、とても不便であった。梅田集会所や天伯山神社の東側では、年中水温12℃前後のきれいなわき水が汲れることなく出て、よく利用されていた。

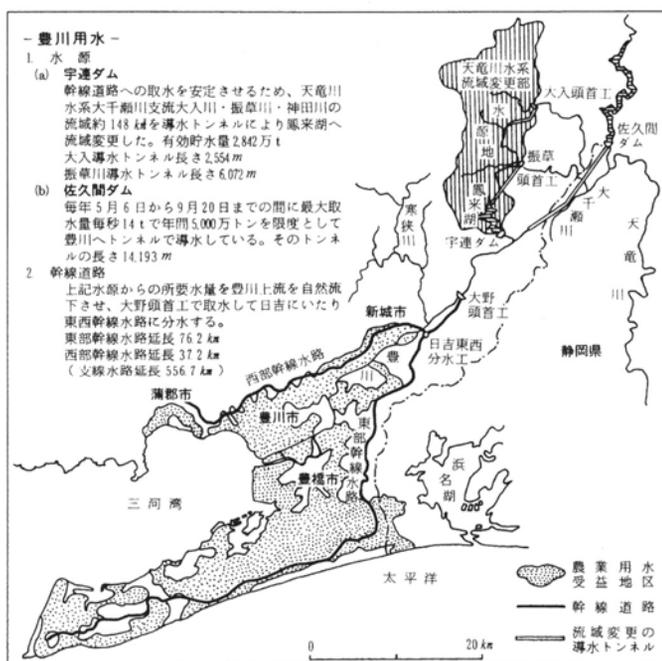
これらの水を木おけなどにくんで、雨の日も寒い風の吹く日も毎日運ぶことは大変な仕事であった。特に風呂をわかす時など、何度も水場まで行き来する苦労は並たいていではなかった。こうして夜にはドラム缶の風呂おけに、開墾で掘りおこした笹の根や松の小枝を燃やして風呂をわかした。満天の星をながめながら1日の汗を流した。野うさぎがとびはねていくのも珍しくなかった。

そのほかに、天伯には大小10数個の池があり、これらの池は古くからのものが多く、年中水の渴れない池や川の付近では稲作が行われた。水の得られないところで陸稲しか作ることができず、戦後の開拓は畑が主であった。

小学校の東、豊橋農協天伯原支店の北側の池は戦後に造られたものである。また人々は入植するとすぐ、手掘りで穴を掘り、雨水を貯めた。しばらくすると井戸を掘る家庭もでてきた。戦後の物資の少ない時代であったので、セメントも手に入らず、井戸のまわりを石灰まじりの赤土で固めた家も少なくなかった。井戸の深さは場所によってかなり差があった。例えば、梅田で6 m、東高田

2組で10 m、東高田3組で3 m、八田平で6 mと、土地の高低によってかなり違った。水温は14℃前後であった。井戸を掘った家庭は多くないが、井戸ができることによって水を運ぶ苦労もなくなった。しかし水質は、鉄分の多いにごった水しか出ない所もあり、飲料水としては適当ではなかった。

豊川用水 愛知県は農業に適した暖かい気候であるが、年によって雨がいく日も降らない日が続くことがある。そのためしばしば干害をうけ、原野のまま開墾されずに残されていた土地も少なくなかった。天伯は台地であり水が乏しく、また水がすぐしみこんでしまう土質なので広い土地が開墾されずに残されていた。



豊川用水幹線水路と受益地区

水さえあれば、田畑を広げ、より生産を高める可能性が大きかったので、人々は早くから用水路ができることを願っていた。この願いは特に渥美半島表浜（太平洋側）の人びとに強かったが、こうした願いをかなえてくれたのが豊川用水であった。

着工以来19年、総工費488億円をかけて

1968年（昭和43年）6月、豊川用水が完成した。私たちの町天伯には、東部幹線水路から水が引かれている。この水のおかげで、畑にはスプリンクラーが水けむりをあげ、ハウスの立ちならぶ近代的な農業地帯に一変したのである。また農家の人々の願いであった水田も多く開かれていった。

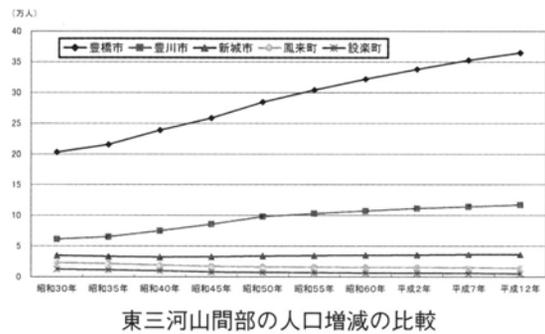
豊川用水通水後の天伯 昭和37年3月、再測量の結果、登記もすみ、土地はやっと個人の所有地となった。開拓が進むにつれて原野や山林がどんどん少なくなっていく。終戦の時、天伯は原野や山林が大部分だったが、昭和46年には11%に減少し、昭和56年にはわずかに2%になってしまった。これは天伯団地や国立豊橋技術科学大学が開拓できたことが大きな原因と考えられるが、昔の天伯のおもかげを残す原野や山林がなくなってしまうのは少し残念でもある。

原野や山林にかわって1番多くの面積を占めているのは田畑である。昭和56年には天伯の全面積の90%を占めており、農業の町として発展してきた天伯らしい数字ではないだろうか。当時、宅地化の波が都市の中心部から周辺部へと広がっていったが、その波におされることなく農業地域として存続しつつあった。

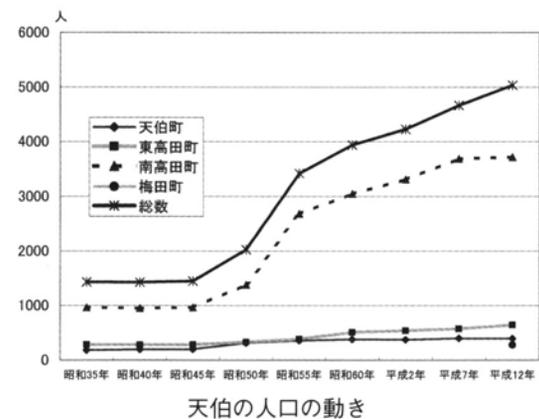
現在の天伯 昭和56年と平成15年の土地利用状況とを比べてみると、宅地（建物敷地）がとて増えて、約20年前の無壁舎（鶏舎など）敷地が宅地化している。天伯では、土地の多くが住宅を建ててはいけな土地（市街化調整区域）になっているが、無壁舎敷地は、市街化調整区域ではあるが建物を建てることのできる土地であった。養鶏のさかんな天伯であったが、この20年の間に養鶏をやめる畜産農家が数多く、現在では2軒を残すのみとなった。その土地に新しい家が急激に建ち始めている。

(5) 人口の動き

天伯の人口はどのように変わってきたか。下のグラフは、豊橋市の人口と東三河山間部の市や町の人口の増減を比較したものである。



昭和30年（1955年）に豊橋市の人口は、20万人ほどであった。その後、年を追うごとに人口が増加し、昭和55年（1980年）には30万人をこした。そして、平成12年（2000年）には36万人と増え続けている。しかし、他の市や町では、わずかな増加がみられたり、山間部では人口が減少していたりしている。天伯の人口の統計は、昭和45年（1970年）から昭和50年（1975年）の間に大きく増え、昭和50年（1975年）から昭和55年（1980年）の間にはさらに急速に増加している。

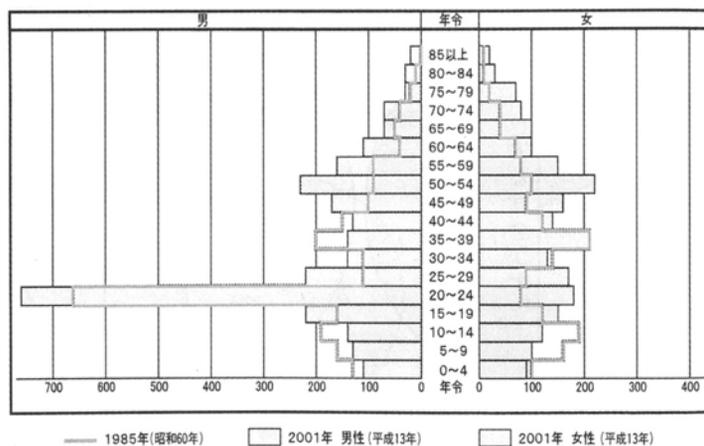


その1番大きな原因となったのは、南高田町に天伯団地ができたことである。団地には、約300戸、1200人の人が住んでいる。（昭和56年（1981年）調べ）これは、天伯の総人口の約40%にあたる。その後も人口は増え続けて

いる。平成12年（2000年）には、5000人を超えている。平成3年（1991年）から平成10年（1998年）にかけての増加の比率も高くなっている。また、平成10年（1998年）には梅田町が、平成17年（2005年）には天伯団地町が、南高田町から分離・誕生している。平成18年4月1日現在では、天伯町（天伯、南高田、梅田、天伯団地）が1761世帯4479人、東高田町が219世帯685人、合計で1980世帯5164人が住んでいる。

現在、天伯は市街化調整区域になっている。そのため、農地に家を建てることができない。さらに、団地も新しく家を建てる土地はない。しかし、住宅化の波が近くまで押し寄せている今、道路の整備、公共施設の充実など開発が進むにつれて人口が増えていくことも考えられる。

校区の年齢別人口 下のグラフは、天伯校区の昭和60年（1985年）、平成13年（2001年）の年齢別人口を表したものである。



校区の年齢別人口

昭和60年（1985年）のグラフを見ると男女とも35才から39才と10才から14才までの人が多いことが分かる。これは、全市的な傾向で、ちょうど「ベビーブーム」といわれる時代と考えられる。その人たちが平成13年（2001年）でも多い年齢となっている。昭和60年（1985

年）も平成13年（2001年）も20才から24才の男性がとびぬけて多いのは、豊橋技術科学大学の学生が校区内に住んでいるためである。

天伯の職業別戸数 開拓が始まったころ、天伯は大部分が農業を営んでいた。しかし、離農して他の職業についたり、また農業以外の職業の人が移り住んできたりして、職業別戸数の構成は大きく変わってきている。

昭和56年（1981年）には校区全体の半数の家庭が会社員の家庭であった。年々会社員の家庭が増えている。

(6) 字および町内会

天伯校区には、天伯町と東高田町の2つの町がある。くらしの上では、総代会の区域である天伯町（元天伯）、南高田町、梅田町（平成10年から）、天伯団地町（平成17年から）、東高田町の5町総代会に分かれている。元天伯は古くから開かれていたところで、元天伯以外は戦後の開拓で開けたところである。

住所の表示・地番については、天伯町（元天伯）は5、南高田町は18、梅田町は5、天伯団地町は3つの字に分かれており、東高田町には字がない。しかし、日常生活には町名でも字名でもない旧農場名や組名が使われている。

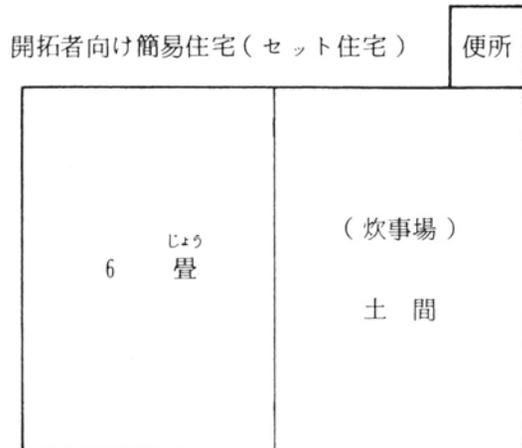
天伯町（元天伯）とか南高田町というのは総代会名だが、泉・豊・和合などがそれらの旧農場名や組名である。（カラー口絵ページおよび20ページ参照）

2 生活

(1) 開拓当時の暮らし

住宅 開拓に携わった人達が建てた家には、大きく分けて2つの種類があった。1つは、元兵隊さんで天伯原の付近で軍の仕事をしてきた人達が建てた物である。もう1つは、戦争で家を焼かれたり、外国から引き揚げてきた人達が入植をして建てた物である。

家の広さは、どちらの場合も10畳から15畳くらいのもが多く、屋根は木の皮を使っていた。今の様に、瓦葺かわらぶきではないが、雨露だけは何とかしのぐことができた。



当初住宅の間取り 6.25坪

上の家の間取りを見てみよう。家族が1つだけの部屋で食事をしたり、布団を敷いて休んだ。炊事場は、土間だった。ガスもなければ、水道もなく、初めの頃は電灯も付かなかった。

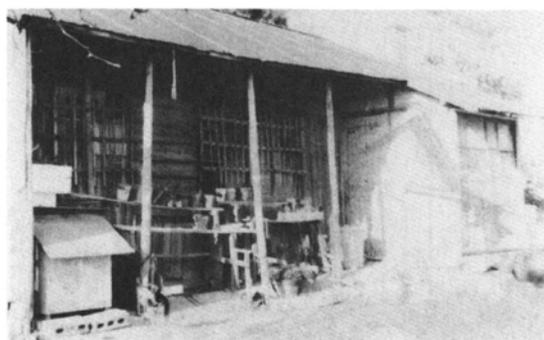
家の窓は、跳ね上げ式のものも多く、ガラスの代わりに、古新聞を張った所もあった。

畳もなく、笹の葉を敷き、その上に、薄っぺらな布団を敷いて、親子が抱き合いながら寒さに身を縮ませて眠る家もあった。

今の家と比べたら想像もできないような、お粗末な建物だったのである。



開拓当時の家①



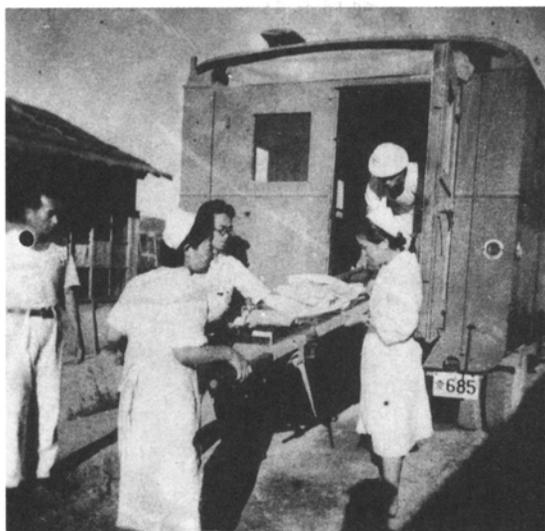
開拓当時の家②

上の2つの写真はどちらも開拓当時の建物であるが今はもうない。

建て方が違うのが分かるだろうか。①の写真は小学校のすぐ近くに残っていた、元兵隊さん達が開拓の当時に建てたものである。一部に手直しがしてあり、完全な元の姿とはいえないが、間取りや作りなどから、当時の様子が想像される。②の写真は、一般の入植者が建てたものである。

医療 次のページの写真は、国立病院のお医者さんと看護婦さんが、天伯地区に巡回診療に来られた時のものである。

当時の食生活は、目を覆いたくなるほど貧しかった。だから栄養不足で病気になる人が多かった。その上、衛生的な暮らしが出来なかったので、病人は増え続けた。しかし、近くにお医者さんはなく、薬も自由に手に入らなかった。開拓者は、自分で自分達の命を守る方法を考えていた。中心になって相談を進



巡回医療①



巡回医療②

めていた人達が、国立病院と話し合いをした。病院側では、さっそく診療班をつくり、毎週、天伯まで出張して患者の診療に当たってくれた。診療が行われる日は、ミドリ十字の旗が、今の農協の近くにひるがえった。

治療室、診察室といっても、今の病院のような設備があるわけではなく、写真でも分かるような、お粗末なものだった。しかし、お医者さんや看護婦さん達による心からの診療

は、患者さん達を感動させた。

夜間の急病にも、快く往診をしてくれた事も何回かあった。苦しい生活を送っていた開拓を続ける人達に、病院も全力をあげて応援をしてくれていた。

おかげで、開拓に携わる人達は、安心して鍬を振り下ろし、土を掘り起こして生産を続ける事ができたのである。

着る物 元兵隊さん達が身に着けていたものを分けてもらって着ている人もいた。女の人でも男の物を着ている人もいた。靴の大きさが右と左が違って、我慢して履いていた。寒い冬でも、夏物の服を何枚も重ね着をして過ごした。

どちらを向いても新品の洋服を着たり、きれいな靴下を履いたりしている人は、一人もなかった。

食べる物 誰でも、いつも空腹だった。お米だけのご飯どころか、サツマイモさえも満足に食べる事はできなかった。

イモのつるや葉も、カエルを食べた人もいた。とにかく口に入れても毒にならないものは、何でも食べて空腹をしのぎ、開拓の^{くわ}鍬を振るっていた。

このように、開拓の人達は、空腹と開墾の2つを相手にして苦しく、貧しい生活を送ってきたのである。

○道路も電気もなくカンテラ生活でした。自分達で道路を作り、開墾^{かいこん}して、笹・松の根をたきものに使いました。演習地なので鉄砲のたまなど出ました。また、高師小僧もありました。

(東高田 森下千明氏)

○その当時はまだ畑はやせていて、肥料も十分買って使うこともできなかった。朝は4時半ごろ起きて真っ暗闇の道を、リヤカーを引いて草刈りに行くと、ふくろうのような夜鳥が不気味な奇声^{きせい}をだしていました。

(1組 清水源栄氏)

○幼い子どもながらみんなよく家の仕事をやりました。ランプの明かりで夜、畑のいもづるを探したりしました。電灯のついた時の喜びはひとしおでした。今の天伯を築いた人々を大切にしていきたいと思います。

(1組 加納信夫氏)

○雑木林を切り開き、掘って建て小屋でランプ生活7年。井戸がなく川の水で、風呂はドラムかんでした。

(8組 小川 保氏)

○盆踊り 21年の夏、レコードもあまりなく後藤公由君・小川高見さんのバイオリン演奏で踊りました。

(4組 森 醇市氏)

○忘れもしません。昭和27年12月16日。この日は木枯らしの吹きすさぶ肌寒い日でした。草むらの中に掘って建て小屋よろしくともいふべき、2間×3間のあばら家に、根笹などが生い茂り、人の住み家とも思えない所に着きました。耕地は荒地2反(約20アール)、その他は小松・根笹・いばらの生い茂る原野でした。翌日から開墾が始まったのです。

(1組 粕谷松男氏)

○町には医者がおりませんでしたので、国立病院の医者が週1回農協で診療をしました。内科・外科・小児科の4人の医者が来ました。巡回診療は昭和24年から始められ1年くらい続きました。子供達の気持ちを和らげるため人形劇を実施しました。

(8組 中西一男氏)

「10年前の思い出」

第7回卒業生

当時天伯小学校5年 浅岡美恵子

「ドドー。ドーン」といやな空しゅうで豊橋中がまるやけだ。長い長いあいだ兵たいについてどこまでも行って、病気にかかった人をなおしたり飲み水のけんさをしていた。そのせんそうがついにおわった……。だがついに日本はまけてしまった。

そして父や母たちは、10人ぐらいずつ組を

くんで、この天伯原に新しくはいったのだった。ここは、もと兵たいの演習場だったため、でこぼこしていて、とても、かいこんをするような所はなかった。住む家も小さな小屋で今のような電気はなく、ランプの光でくらしていたそう。父は、よく「こんなしごとやめてほかのしごとやろう。」と口ぐせのようにいっていたそうです。おさなかつたねえちゃんをだいて、父や母たちは苦しい生活をしてくらしていた。たべものはキャベツの青い葉を食べたのだ。まだ、たまになつていないキャベツ……。そんなものがうまかるうか。だがそのころは、それがはいきゅうだった。さつまいもといえは今のくずいもぐらいのものしかとれず、母は赤ちゃんにおちちをやるのだが、たべものが、こんなものだったので、赤ちゃんだったあねは、ちちがでないためとてもぐずった。母もきつと「かわいそうに。」と思ったにちがいない。

ある夜のことだ。父が母にいった。

「この子をおばあさんの所へ、あずけたほうがよい。いままでどおりにしていたら、おれたちが、いまに、くらしにこまってしまうぞ。畑を1人でやって1日に、どれだけおこせられると思う。考えてみろ。金ばかりつかってはだめだ。そんなことでどうするのだ。あしたいってあずけてこい。」といった。母は下をむいて、だまっていた。しばらくたって母は顔を上げて、「あの子にやるちちはどうするのです。」と言ったら、父が大きな声で、「牛がいる、牛のちちでたくさんだ……。そればかりか、もったいないくらだ。あすにでもあずけてこい。早い方がいい。」といてねてしまった。

母は、夜どおしそのことばかり考えていた。とうとう母はあねとわかれた。わかれる時、赤ちゃんのあねはむじゃきにはしゃいでいたそう。母はもうなんといいいやらわか

らなかったぐらいだったそうだ。

そして3年たってあねは母のもとへきた。父や母はとてもよろこんだ。だが父の顔を見るととつぜんなきだしてしまった。父は「わりもない。」といった。そしてまもなくわたし生まれ、1年たち家をうつし、新しい家にうつった。そして1年おいて弟が生まれたのだそうだ。こたつへあたりながら母が話してくれた。

今では、みんな大きくなっている。あねは中学3年、高校へのじゅんぴにいそがしい。わたしは5年、弟は3年。あかるいきもちで元気に一家5人は貧しいながらもしあわせに1日1日をおくることができるようになって、生活しています。

一開拓地の子供たち 小学生・中学生の作文集 昭和36・3 愛知県農地開拓課編一

◇大砲の玉 天伯原は長い間陸軍演習場として使用されていた。そのため、戦後開墾をしていると、よく錆びた大砲の玉などが落ちており、時にはかたまって出てきた。農家の人々はそれを集めておいて鉄くず屋に売った。真鍮しんちゆうでできている物もあるので、良い値で売れたが、時には不発弾などもあり爆発した事もあった。

電灯 電灯がつき始めたのは昭和22年7月からだが、耕地の一角に宅地があるという農業中心のいわゆる散村なので、水道・電気などの架設には不便だった。昭和27年になってやっと最終の電灯工事が出来上がった。この頃からラジオも聞けるようになったが、それまでは子供達の楽しみの為に、おじさんや青年団の人達が農協の空き地で人形劇をやって見せてくれた。昭和29年は白黒テレビの放送が始まった年だが、天伯ではやっと80%の家でラジオが聞けるようになった。

電話 昭和25年9月18日に天伯地区に最初の

電話が引かれた。小学校は市内局番なしの6165番、農協は同じく6166番だった。電話を引くために青年の人達が出て、電柱を立てる為の穴掘りをした。多くの家に電話が引かれるようになったのは昭和45年頃からである。携帯電話の普及している現在と比べるとなかなか想像できないような話である。

テレビ 家庭でもいろいろな電化製品が使われ始めた。テレビの普及率は、東京オリンピックを前にした昭和36・7年頃から急に伸びてきた。

(2) 現在の暮らし

新しい住宅 高田山に天伯団地が造成されて以来、天伯校区には、まとまった住宅造成はなかった。しかし、1980年代、1990年代になると、小学校東側にある和合、南側に位置する豊や中原、校区の南端に位置する中島には、住宅地が造成された。それに伴って、校区における人口も増えていったものと思われる。コンビニエンスストアの進出 学校西側にある県道沿いに、コンビニエンスストアサークルKが平成5年にオープンした。平成11年には、ミニストップがオープンし、どちらにもぎわいを見せている。

校区の人達だけでなく、県道を通る多くの人達が利用している。その理由として、県道を通る人が多いことが挙げられる。

学校西側を通っている県道は豊橋市中心部



コンビニエンスストア

から天伯校区、高根校区を通過、海岸へと続く道である。また、国道1号線から、海岸への連絡に使うのにも便利な道である。そのため、サーフィンなどのマリンスポーツをする人達が、使う頻度がかかなり高い。

整備される環境 校区の人達の努力によって、校区内の環境がかかなりよくなってきている。昭和55年（4月28日告示）に、小松原街道（県道小松原小池線）のバイパスが開通、小学校プール裏道路の舗装・西門電灯の整備、団地入り口の信号・道路の整備、市民館用の駐車場整備などである。さらに平成16年・17年には勢徳寺前から小学校までの歩道の拡幅、平成18年小学校正門の整備がされた。

今後は校区南端よりもさらに南に国道23号バイパス七根インターが19年2月に開通する予定である。

(3) これからの天伯

この校区は面積4.54平方キロメートル、平成18年4月1日現在、戸数1980世帯、人口5164人である。豊川用水の通水により土地利用の様子も大きく変わり、その後の団地造成により、地域の環境も大きく変わった。これからは県・市の地域開発にそって大きく発展することだろう。

愛知県・豊橋市の開発の方向 愛知県では、地域作りを進めている。この計画の中で豊橋市は、田原市とともに都市開発区域として定められている。これまで豊橋市は、東三河地域の中心とした地域作りが行われてきた。最近では、隣の地区の新城市や北設楽郡、隣の県の浜松市との繋がりも強まってきた。今後さらに、伊勢湾の沿岸に位置する地域の東西南北における中心都市としての豊橋に愛知県では大きな役割を期待している。

そのためには、第2東名高速道路や伊勢湾口道路の交通網の整備をはじめ、三河港の機能の高度化を図るとともに国際的な流通の中

心としての役割も期待されている。一方、この地区は、園芸、野菜、畜産を中心に全国でも有名な農業地帯になっている。今後、国内だけでなく、外国の農作物との競争も激しくなる事が予想され、それらへの対応も課題としてあげられる。また、豊かな自然を生かした観光、リゾート地としての開発、三河湾の水質浄化と自然環境の保全に積極的に取り組んでいくことも大切である。

このように、職・住・遊・学の調和したまとまりのある生活圏の形成を目指している。

天伯のまちづくりの方向 天伯校区は、豊橋市の「サイエンス・クリエイト21計画」推進地域に入っている。サイエンス・クリエイト計画とは、今後の技術革新、情報化・国際化といった経済の激しい変化に対応できるように産業の高度化を図る計画である。その計画によって、平成4年には「豊橋サイエンスコア」が西幸町に作られた。

また、豊橋市は、資源化センター周辺地域において新焼却炉から発生する余熱などを資源エネルギーとして利用する「エコビレッジ構想」を進めている。余熱を利用した施設（温水プールなど）の建設や総合農業公園の整備（市民ふれあい農園、農産物販売施設等）を図る。

「エコビレッジ」の対象地区に入っている天伯の地域も、この計画によって今後大きく変わっていくであろう。

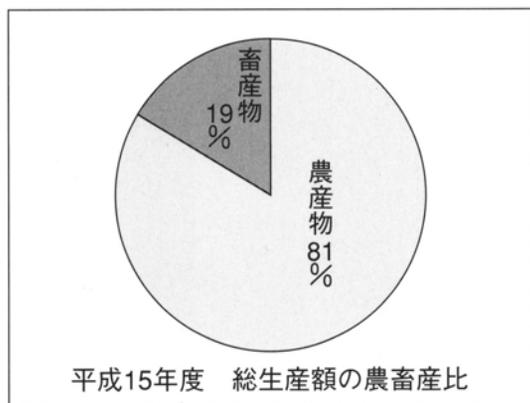
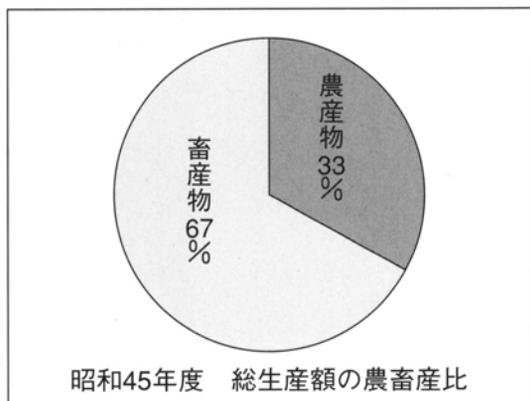
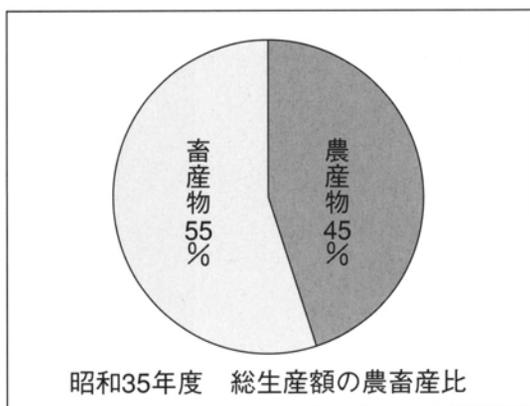
これからの課題 これからの天伯は、自然景観と都市機能の調和を図り、地域の特性を生かした快適で魅力ある町づくりをしていく必要がある。

豊かで住みよい天伯。「静かな田園風景の残された調和のとれた発展」をした緑の町をいつまでも続かせるために、豊橋市の開発計画にそって30年、いや100年の計画が大切であると思う。

3 天伯の産業

(1) 農業と畜産業

次のグラフは、天伯の農・畜産物の総生産額に対する割合である。



入植当時は畑作が行われていただけであった。しかし、2、3年のうちに卵の生産が始まり、やがて豚や牛の飼育が行われるようになった。農・畜産物の総生産額に対する畜産の割合も伸びてきた。昭和51年(1976年)

には畜産が80%を超えたという記録もある。しかし、畜産は昭和55年(1980年)年頃から大幅に減っている。農産は露地栽培中心だったものが昭和44年(1969年)ごろから施設園芸が行われるようになり、生産額は伸びている。

昭和50年(1975年)代までの天伯の代表的な産業は農業と畜産業であった。現在は農業が中心であるが、県道小松原・小池線沿いには商店も多く、校区内には工場も見られる。

(2) 農業

農業の移り変わり 戦後、最初に入植した人たちは、まず、さつまいもと麦の栽培を始めた。しかし土地がやせているため、さつまいもも麦もどうにか食べられるといった出来具合だったようである。そのため最初の5、6年は、土を肥やすためにたいへん苦労した。市街地のごみを集めたり、ふん尿を集めたりして、やせた土地に入れるなどの努力を重ねた。戦後の食糧難もやわらぎ、世の中がだいぶ落ち着いてくると、芋類の生産が減り、かわっていろいろな種類の野菜が栽培されるようになった。化学肥料の使用や耕運機などの普及によって生産量も伸びてきた。昭和50年(1975年)以降は、トラクターやコンバインなどの大型でより自動化された農業機械が続々と導

昭和23年	麦類 14%	いも類 75%	野菜 11%		
昭和28年	米 7%	麦類 47%	いも類 16%	野菜 28%	その他 2%
昭和35年	米 7%	麦類 26%	いも類 20%	野菜 36%	その他 11%
昭和46年 [5,160万円]	米 10%	いも類 5%	野菜 79%	その他 6%	
昭和55年 [2億1,748万円]	米 2%	野菜 98%			

農産物の総生産額の内訳

入されるようになり、機械化が進み農作業にかかる時間は短縮された。しかし機械が高額なため農家の負担も増えた。

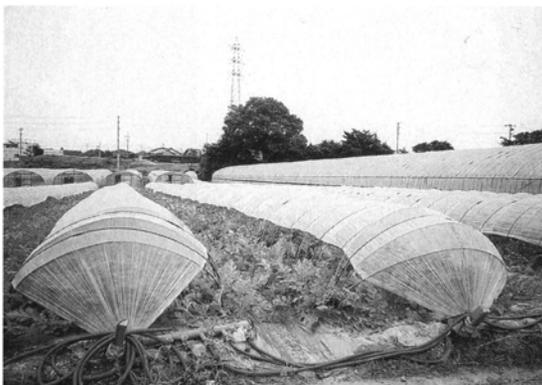
水が手に入りにくいための苦労も多かった天伯の農業であったが、昭和43年(1968年)に豊川用水が開通すると、作物の種類や生産量が大きく変わった。今まで水が少ないためあまり栽培されなかった作物も作られるようになった。またいつでも必要なだけ水が使えるようになったので作物の生産量も大きく増えた。

さらにこの頃から施設園芸的な作物が増えてきたのも特徴の1つである。昭和46年(1971年)からハウスを使ったトマトの生産、昭和51年(1976年)からミニトマトの生産がさかんになり、トマトとミニトマトの生産額が総生産額の50%を占めたこともある。

夏の作物(天伯スイカ) 春、天伯のあちらこちらの畑にビニールトンネルやビニールハウスが何本も作られているのが見られる。それらの中には、定植されたスイカの苗が同じ



昔のスイカ畑



今のスイカ畑

ような間隔で並んでいる。

やがて6月になると、スイカ畑は地面も見えないほどの緑におおわれる。その緑の葉の間からは、緑と黒のたてじまの丸いスイカの姿が見られる。昭和50年(1975年)頃とくらべるとスイカを作る農家はだいぶ減っているが、それでも天伯の夏の代表的な作物はスイカとってよいであろう。

天伯の畑は洪積層の赤土で、それがスイカの甘みを増しているのだそうだ。もちろん昔から天伯のスイカが有名だったわけではない。スイカ栽培にたずさわった農家の人たちが苦労して、より甘くて質のよいスイカを作るために学習を積み重ねてきたから現在のように有名になったのである。新鮮さを示すためつるをつけて出荷したり、ヘリコプターを使って宣伝をしたりと、販売量を伸ばす努力もしている。

また、早作りをして5月下旬から出荷したり、反対に時期をずらして10月に出荷できるようにしたりもしている。

冬の作物 スイカの取り入れも終わった畑では、冬に出荷する野菜の栽培が始められる。キャベツや白菜、ブロッコリーなどが作られる。豊川用水の水がスプリンクラーによって畑中にまかれる。



スプリンクラー

現在の天伯の農業 かつては開拓によって作られた畑が広がっていた天伯であるが、現在はその風景も変わった。技術科学大学や資

源化センターなどの大きな施設ができ、天伯団地には住宅が並んでいる。畑やハウスのまわりには住宅や商店も増えた。

農業も露地栽培が中心であったが大型のハウスや温室を使った施設園芸をしている農家が増えた。最近のハウスや温室は室温、湿度、日照などがコンピュータで管理されているものもある。そこではミニトマト、トマト、花(切り花、苗)メロン、いちご、大葉などが作られている。



温室

これからの天伯の農業 農業がさかんだった天伯であるが、農業だけでやっていくことはとてもむずかしくなっているため、農業をやめてほかの職業につく人も増えた。また、後継者がいない農家もある。作物の価格が不安定なことも農家の人には悩みとなっている。「昨年はいへん高い値段で売れたのに、今年はとても安くてもうけがほとんどない。」こんなことがあるのである。また、外国産の野菜が大量に輸入されるようになったこともあり、農産物の値段はあまり上がっていない。一方ハウスやトンネルなどの設備、機械、肥料などにかかる経費は増えているのである。農業をやめる人がいる中で、いろいろな工夫をし、新しいスタイルで天伯の農業を伸ばしていこうと努力している人たちもいる。

○作った野菜は大型スーパーへ直接納品します。スーパーといつ何を納品するかを相談し、それにそって作ります。スーパーでは私

の作った野菜は私の名前をつけて売られています。おいしく、安心して食べられる野菜を作って、お客さんに「また買いたいな。」と思ってもらえるようにしたいと思っています。

(7組 原 忠寛氏)

○農業をやめた農家の土地も借りて大規模に夏は赤シソ冬は白菜を作っています。広い土地で作業するには大型の機械を使います。私は私の作る物にあわせて使いやすいような機械を開発しています。広い土地に季節に合わせて1種類の野菜を大量に作っています。

(2組 柴田隆夫氏)

○私はしいたけを作っています。以前は原木を使ってしいたけを作っていましたが、今はおが粉を固めたブロック状の物を使っています。これだと広い場所がなくてもたくさんのでしいたけを育てられます。温度、湿度を一定にした部屋の中で、季節に関係なく1年中同じように収穫します。

(7組 宮下和彦氏)

○祖父はすいか・キャベツ、白菜を作っていましたが、私は大型のハウスを建ててバラの花を育てています。土を使わずロックウール栽培をしています。バラはデリケートな作物なので病気にならないように注意し、品質の良い花を育てるのに気を使います。18,000株を毎日世話、管理、切り取りなどをするのはたいへんですが、愛情をかけて育てた花が美しく箱詰めできたときはとてもうれしいです。バラも外国から入ってくるようになってきましたが、品質の良さで勝負したいと思っています。研究を重ね、いろいろな品種を育てることに挑戦していきたいです。

(梅田 加藤秀司氏)

○私は会社勤めをしていましたが、父母はすいか・白菜を作っていたのでいずれは農業を継ごうと考えていました。私が家に入ったのを機会に、大葉を専門に作るようになりま

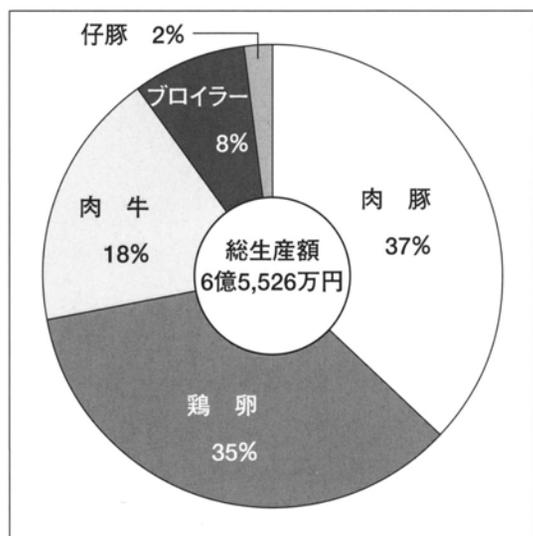
した。大葉は植えるのも収穫するのも束ねてパックにするのも全部手作業なので大変な仕事です。将来は冠水・換気・施肥などが自動管理できるシステムにしていきたいと思っています。家では大葉を作るだけでなく、お店で宣伝したり大葉ジュースの試飲会を開いたりレシピを配ったりなど消費量を増やす努力もしています。

(天伯 加藤浩二氏)

(3) 畜産業

やせた土地を改良するために家畜のふん尿はたいへん貴重であったし、機械化される前の農家にとって、牛は農作業の大きな労働力でもあった。そこで、入植し何年かすると牛や豚、鶏などを飼う農家もでてきた。昭和20年(1945年)代後半には乳牛、肉牛、豚、鶏の飼育に力を入れる農家も増えた。天伯で畜産がさかんになった背景には、畑作は天候に左右され収入が不安定であったこと、土地がやせていて、思うように収穫が伸ばせなかったことなどがある。

次の図は昭和55年度(1980年度)の畜産物の総生産額をあらわしている。



昭和55年度畜産物の総生産額の内訳

この頃が天伯で1番畜産がさかんだったころである。大規模な施設で多くの頭数を飼育

する専門の畜産農家もたくさん見られた。

しかし昭和50年(1975年)代後半になり住宅が増えてくると、ふん尿処理や悪臭に対する苦情への配慮などの問題がおこり飼育が困難になった。宅地化が進む中で畜産を続けていくためには、ふん尿処理施設の設置や飼育施設の改造にたくさんのお金がかかる。また昭和60年(1985年)以降に、外国産の畜産物が大量に安く輸入されるようになり、肉の価格が下がったことや飼料や燃料が年々値上がりしたことが、より経営を難しくした。このようなさまざまな問題をかかえたり、後継者がいなかったりしたために畜産をやめる人も多くなった。

平成18年2月1日現在天伯では酪農9軒、養鶏2軒、養豚2軒、肉牛1軒、養鶏(うずら)2軒、アイガモ1軒が経営されている。

4 交通の発達

豊橋が交通の便のよいところであることは、豊橋の位置のところに書いたが、中心地から天伯への交通はあまり便利だとはいえない。東海道本線二川駅から3.5km、豊橋駅からは8kmはなれている。バスが通っていなかったころは、二川駅か渥美線の高師駅へ歩いて行った。開拓当時は自転車がある家もめずらしかった。

(1) 道路のようす

小松原・小池線(豊橋から白須賀まで) 明治41年、天伯原が陸軍の演習場であったころ、兵隊が通るための道がたくさん作られた。

県道小松原・小池線は明治のころからたいへんりっぱな道路で、道幅も現在と同じくらいあった。道路工夫が1人つききりで道路の整備をしていた。梅田川から砂利を取って、道路に敷いていた。もともと軍道としてできた道であったから、射撃の演習中は通行禁止

になった。くさがりが張られ、番兵が立っていた。

現在の道路は昭和42年（1967年）から45年（1970年）にかけて舗装されたものである。梅田川にかかっているこの橋は、御厩橋である。平成9年（1997年）10月に改築された。



御厩橋

その後、市の発展にともない都市計画が進み、県道に沿ってバイパスが整備された。

東七根・藤並線（高田橋から学校の前を通り小松原・小池線に合流、校区の南の端で分かれて東七根まで）この道も県道である。演習場のところはやはり軍道で、坪口川を越えた坂のところにくさがりが張られるようになっていた。

昭和38年（1963年）から42年（1967年）にかけて舗装された。児童の通学路としても大事な道であるから、昭和43年（1968年）から45年（1970年）にかけて歩道が造られた。

農業幹線道路 2本の県道のほか、何本かの農業幹線道路が造られ、大部分が舗装されている。

以上のように、開拓当時は泥んこ道であったこれらの道も、だいぶ舗装された。しかし、農業も機械化され、自動車時代の現在では、道の狭いことが問題になっている。

(2) 乗り物

バス 天伯校区の公共交通機関はバスである。校区を通るバス路線は2本あるが、いずれも豊橋鉄道のバスである。

豊橋技科大線 昭和22（1947年）・23年（1948年）ごろから通っているが、昭和27年（1952年）から白須賀線と名づけられ、昭和53年（1978年）から細谷線と改められた。平成18年10月1日からは豊橋技科大線となり、技科大前から細谷東の区間が廃止された。また、豊橋技術科学大学を通過して野依福祉村まで通るものは平日で14本、土日・祝日では12本のバスが走っている。

天伯団地線 団地ができる通勤・通学・通院・買い物などのために、交通機関が必要となってくる。人びとの強い希望があって、昭和53年（1978年）から運行が始められ、昭和57年（1982年）には1日10往復していた。現在でも、平日には10往復、土日・祝日は9往復している。

オートバイ・自動車 公共の乗り物の便があまりよくなかったから、オートバイは比較的早くから購入された。昭和37年（1962年）に購入した家が1番多く、その年だけで44軒購入している。

オートバイと同じように、昭和37年（1962年）から多く購入されたのがトラックである。農産物の集荷・販売などに、トラックはなくてはならない農機具の1つとして購入された。そして乗用車である。自動車時代を反映して、昭和42年（1967年）には、33軒もの家で乗用車を買った。その後、乗用車がぐっと増えた。校区内のほとんどの家では乗用車が1台以上あり、農家でも、小型トラックと乗用車の複数の自動車を持っている。

現在、自動車が増えたことで、駐車場の不足が問題になっている。天伯団地でも駐車場不足から路上駐車が増えるという問題が起きており、地域の方の協力のもと、団地内に数ヶ所の駐車場をつくるなどして、その対応に当たっている。

第3章 教育と文化

1 教育施設

(1) 小学校

昭和7年(1932年)、高師村が豊橋市に合併になるまでは、天伯は渥美郡高師村の一部であった。合併によって豊橋市天伯町になってからも住んでいる人は少なく、高師小学校の校区であった。

天伯から高師小学校への通学は、道のりも長く、特に低学年の子どもたちにとってはつらいものであった。雨風の強い日などは、いっそう大変であった。道はどろどろになり、ずぶぬれになって通学することもあった。

そこで、地元の人々の願いにより、天伯に高師小学校の分校を作ることになった。

○高師小学校天伯分校の建設に当たり、南高田開拓団が中心となり、気運を高め、天伯原開拓農業協同組合となって近隣の町内に呼びかけた。用地は離農した人の土地を市に提供し、分校が開校した。

(梅田 武藤滋治氏)

まず、昭和23年(1948年)の12月からあくる年の2月まで、父兄による整地作業が行われた。忙しい年末年始、寒さも厳しい時であったが、自分たちの学校を作るというので、みんな喜んで働いた。そして昭和25年(1950年)1月8日、豊橋市立高師小学校天伯分校が現在の場所に開校した。校舎はできたが、風を遮る樹木もなく、赤土の運動場は雨のたびに歩くこともできないほどぬかるんだ。しかし、分校ができたおかげで、低学年の子たちは通学がとても便利になった。

1年生から3年生までで、児童数は約60名、先生は4名であった。4年生以上は高師小学校へ通っていた。分校で学んだのは南高田町のみで、元天伯は高師小学校へ、東高田町は二川小学校へ通った。

校区の独立 分校時代は、5年間続いた。そのころの学校の様子や校区の独立のことについて、町の人々は次のようにいっている。

○私たちの町は高師校区で、子どもは高師小学校に通っていました。天伯分校を本校として、天伯校区を作る話がもち上がり、「あくまで元のままでいい」という人と、「分校が本校になり、天伯校区を作れば子どもが通学するのに便利だ」という人と対立し、何回も集会を開きました。採決の結果2票の差で天伯校区に参加することになりました。

(天伯 伊藤明士氏)

○子どもたちが通学するのに心配でしたが、天伯校区になってから大変便利になりました。当時、長女は高師小学校へ通っておりまして、雨の日は本当に困りました。

(天伯 横田 敏氏)

○天伯分校ができたときは、まだ給食調理員がいませんでしたので、毎日2人ずつ交替で手伝いに行きました。献立は、パンと粉末ミルクと味噌汁で、パンにクリームが付けば上等でした。そのクリームを焦げ付かないように作るのが大変で、いっしょうけんめい作りました。子どもたちが残さないでみんな食べてくれた時はうれしかった。

(8組 古川政平氏)

4年生以上は高師小学校へ通ったが、片道

1時間以上かかるうえ、道が悪かったので、子どもたちはとても苦労した。

そこで、分校を天伯小学校として、高師小学校から独立させようという強い願いが、父兄から出るようになった。町民が何回も集会を開いて話し合った。また、市教育委員会の教育課へくり返しお願いに行った結果、天伯小学校として独立することになった。

昭和30年（1955年）4月1日に、豊橋市立天伯小学校として開校式を行い、校区も高師校区から独立した。開校したときは、先生7名、児童数192名であった。

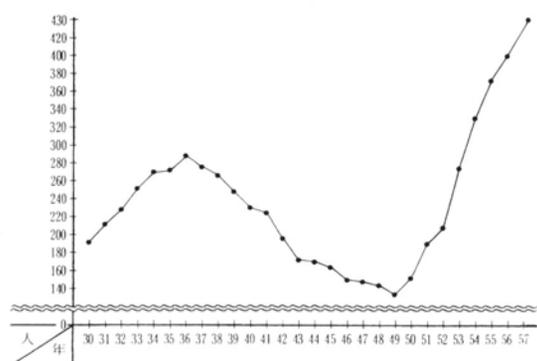
この結果、子どもたちの通学が楽になったが、それ以上に、自分たちの学校ができたという父兄の喜びが大きかったそうである。

学校の環境を整えるために、父兄も子どもたちも職員も、力を合わせて働いた。開校当時はあまりなかった樹木も、三ノ輪病院跡から、父兄が牛車などで運んだり、みんなの庭から持ち寄ったりして、だんだん整ってきた。

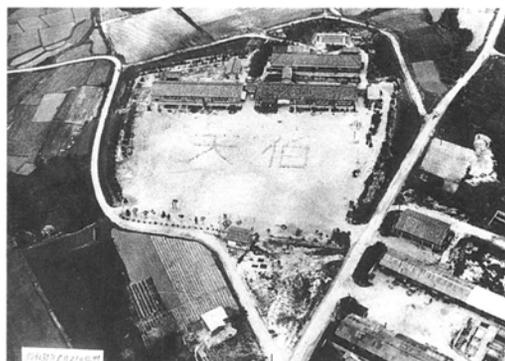
子どもたちは、父兄から寄付してもらった仔豚の世話をした。その仔豚を売ったお金で、低鉄棒を作ったり、幻灯機を買ったりした。

その後の児童数の状況や校舎の移り変わりは、次の写真のようである。

児童数は開校後昭和36年（1961年）まではぐんぐん増えて、300人近くになったが、その後はだんだん少なくなり、昭和46年（1971年）には150人を下回るようになった。しか



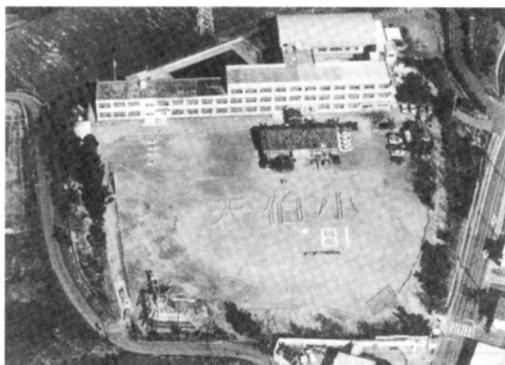
天伯小学校児童数の移り変わり



昭和 35 年



昭和 45 年



昭和 56 年

し、昭和49年（1974年）ごろから住宅団地が造成され、入居が始まると児童数が急激に伸び、一時は450人を超えた。少子化を迎えた現在では、緩やかに減少しており、平成18年（2006年）4月現在329人の児童数となっている。

天伯小学校は、平成16年に創立50周年を迎えた。校区総代会、PTA、簡易保険会、同窓会が実行委員会を作り、平成16年11月21日には全校児童のほか600人を超える地域の人々が参加し、盛大な記念式典を行った。また、18年度には歩道の拡幅により廃止することになった農協のガソリンスタンド跡地を市

役所に購入してもらい、集まった寄付金などを使って新しい校門の整備を行った。

天伯少年防犯隊 天伯少年防犯隊は、天伯小学校が開校した昭和30年（1955年）の5月に結成された。当時、各農家は畑仕事に忙しく、特に農繁期には留守がちになるため、少年たちの手で盗難や火災の防止につとめ、家の人たちに安心して仕事をしてもらおうとしたのである。4年生以上の児童によって巡回が始まり、次のような活動を行った。

- ア 各家庭の鍵を点検してまわる
- イ 農作物、とくにスイカの盗難防止
- ウ 水難事故の防止
- エ 下級生の登下校時の交通安全指導



少年防犯隊の巡回

子どもたちの活躍で、スイカ泥棒や空き巣の被害はほとんどなくなった。また、こうした活躍に対し、警察署や防犯協会・県知事・日本善行会などから表彰を受けた。

数々の功績を残した天伯少年防犯隊であるが、平成に入ると、「子どもたちにそんな危険なことをさせるのはどうか」といった声がだんだんと聞かれるようになった。また、天伯団地の造成等、時代の変化によって農家の数も減ってきた。

こうした変化から、防犯隊の活



少年防犯隊のバッジ



少年防犯隊の表彰

動として自分たちの生活を向上させるために530運動を行ったりしてきたが、平成7年（1995年）3月末をもって、天伯少年防犯隊は廃止された。

(2) 保育園

勢徳寺の住職大橋透関氏が、昭和29年（1954年）6月から託児所を始め、近くの子どもたちを預かっていた。幼児数は30人から40人くらいであった。



天伯保育園

昭和38年（1963年）4月、天伯小学校の近くに建物を完成し、天伯保育園として豊橋市から認定された。昭和51年（1976年）4月から天伯山神社の近くに鉄筋の園舎を建設し、現在の園児定員は150名となった。天伯小学校に入学する児童は、ここの卒園者が大部分である。

(3) 豊橋技術科学大学

最近の著しい技術の発展に応じることのできる指導的技術者を養成するため、国により天伯町字雲雀ヶ丘につくられた。開学は昭和

51年（1976年）10月1日である。

約3.6平方キロメートルの敷地の中に、研究棟・実験棟・講義棟など多くの施設がある。また、21世紀の情報化時代に向けてマルチメディアセンターが設置されている。ここを中心として、国内外のさまざまな機関と連絡をとりあいながら研究を進めている。



豊橋技術科学大学

外国人留学生を含め、全国各地から集まった約2000名の学生が、将来の指導技術者をめざし学んでいる。

2 その他の施設

(1) JA豊橋天伯原支店

天伯小学校の前には、JA豊橋天伯原支店（平成18年3月末現在組合員数566名・440戸）がある。



JA豊橋 天伯原支店

昭和21年（1946年）の入植当時開拓団として結成し、昭和23年（1948年）からは天伯原

開拓農業協同組合として長く営農の中心となってきた。平成9年（1997年）4月、市内の5つの総合農協が合併し、JA豊橋天伯原支店として生まれ変わった。組合ではいろいろな仕事をしているが、おもな仕事は次のとおりである。

JA豊橋 天伯原支店の仕事

信用・貯金・融資・為替・信託・ATM
共済・生命共済・火災共済・自動車共済
動物病院一家畜・ペットの診療

昭和38年（1963年）に建てた天伯原支所当時は、日用品・食料品・野菜・文房具・衣料品なども売っていた。その後、この建物の南へ新しい建物が総工費2000万円をかけて昭和47年（1972年）6月10日に完成した。さらに、平成4年（1992年）に改装工事を行い現在の姿となった。

(2) 校区市民館

昭和58年（1983年）4月1日、天伯小学校の隣に、鉄筋コンクリート2階建ての校区市民館が建設された。



校区市民館

館内には、図書室・和室・会議室がある。そこでは、講習会が開かれ、ダンス・カラオケ・コーラス・生け花・書道・編み物・着付け等、毎晩遅くまで行われている。また、授業後の児童を預かる児童クラブも開設されており、市民の憩いの場として広く利用されている。

(3) 集会所

校区には、地区別に1つずつの集会所がある。婦人会・農協の集まり、町内の集まりなどに利用されている。これらの集会所は、はじめは集荷場として建てられたものである。団地にはりっぱな公民館が建てられ、催しものにも利用されている。



梅田町集会所

(4) 東高田給水所

東高田町には、地下水を利用した給水所がある。

南高田地区では昭和35年(1960年)4月に水道工事が始まった。簡易水道である。1軒当たり23000円ずつ組合からお金を借りて、水道をひく費用にしたそうであるが、工事に出て働き、その日当を工事費にあてたので、実際に費やしたお金は少なくてすんだそうである。東高田地区では昭和43年(1968年)から工事が始まった。東高田町の開拓のところに書いたように、畑のかんがい用に掘った井戸を南高田のものをつなぎ、校区の全部の家に水道がひけるようになったのである。平成2年(1990年)3月に市の上水道に加入してからは、簡易水道としては利用されていない。

東高田給水所は、現在でも1日200 m^3 、年間73,000 m^3 の水をくみ上げ上水道へ供給している。

(5) 消防団とその施設

校区の独立と同時に消防団も独立した。器具置場をつくり、防火用水も設けた。

天伯の消防団は、豊橋市消防団第6方面隊天伯分団という。各町内会から選出された17名の団員が活躍しており、身分は地方公務員である。消防活動のほか防災など生活の安全や安心にかかわる活動をしており、住民にとってとても大切な役割を担っている。



消防団器具庫

(6) 寺

昭和25年(1950年)6月、当時の住職大橋透関さんが、県道小松原小池線と東七根藤並線の交差点、深見商店近くに3畳敷のお堂を



勢徳寺

つくり、子ども会の行事として紙芝居などを行いながら、布教をしていたそうである。昭和27年（1952年）7月、蒲郡市相良町にあった勢徳寺を、現在の天伯町字中里42番地に移した。当時の天伯原開拓農協177戸の人たちが2000円ずつ出し合い、精神的なよりどころとして建てたのだと、大橋さんが話してくれた。現在の檀家は、天伯で130戸、大清水で70戸、東高田・若松・岩西・二川等で200戸ほどある。

(7) 神社

校区には4つの神社がある。

ア 天伯神社



天伯神社

天伯神社は4つのうちで1番古く、大正時代に建てられたもので、秋葉神社・伊勢神宮の神様がお祭りしてある。昔は10月15・16日がお祭りだったが、今は10月の第2土・日曜日に行われ、もち投げがある。また秋葉神社もお祭りしてあるので、12月15日に町内から2名の人が本宮に代参に行き、お礼を受けて来て16日にお祭りをする。

イ 天伯山神社

校区内の1番高い所を選んで、昭和25年（1950年）10月に造られたのが天伯山神社である。出雲の神様が祭られている。南高田町・梅田町・天伯団地町の800戸余りが氏子になっている。春祭りは春分の日、秋祭りは10月の第2土・日曜に行われる。もち投げと花火



天伯山神社

奉納がある。この神社の境内は広く平らになっていて、桜の苗木がたくさん植えてある。広場は整備され、町内のいこいの場所になっている。本殿は昭和50年（1975年）11月2日に新築された。昭和55年（1980年）には、境内に開拓記念館が建てられた。

ウ 伊豆栄神社

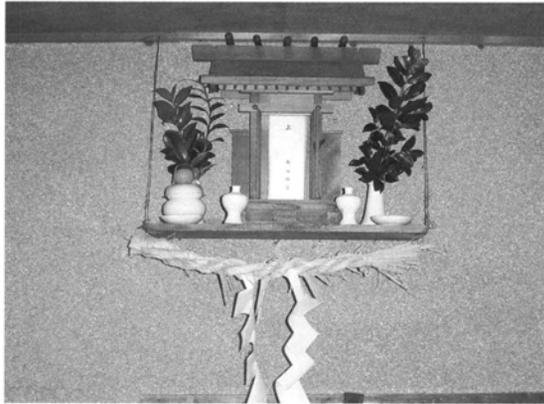


伊豆栄神社

昭和26年（1951年）10月7日、長野県下伊那郡阿南町から持って来たもので、ににぎのみこと・いざなぎのみことが祭ってある。本殿は昭和53年（1978年）10月に改築され、伊豆栄神社となった。

エ 中島神社

昭和25年（1950年）ごろ名古屋の熱田神宮からお札を受けて来てお祭りした。年に1度熱田神宮に代参し、お札を受け納めている。中島集落60戸余りが氏子になっている。お祭りには、子どもみこしや子どもかぐらがある。



中島神社

現在でも、子どもたちが獅子頭をつけて各家庭を回り、おだちんをもらう。現在では、ほこらはなく、中島集会所内にお札が祭られている。

(8) 豊橋開拓記念館

開拓35周年を記念し、昭和55年（1980年）10月11日に、天伯山神社の境内に建てられた。



豊橋市開拓記念館

開拓当時の写真、農耕具や生活用具など、たいへん貴重な資料が保存されており、開拓者の苦勞と努力の跡をしのぶことができる。集会のための部屋も設けられており、地区の人々に利用されている。

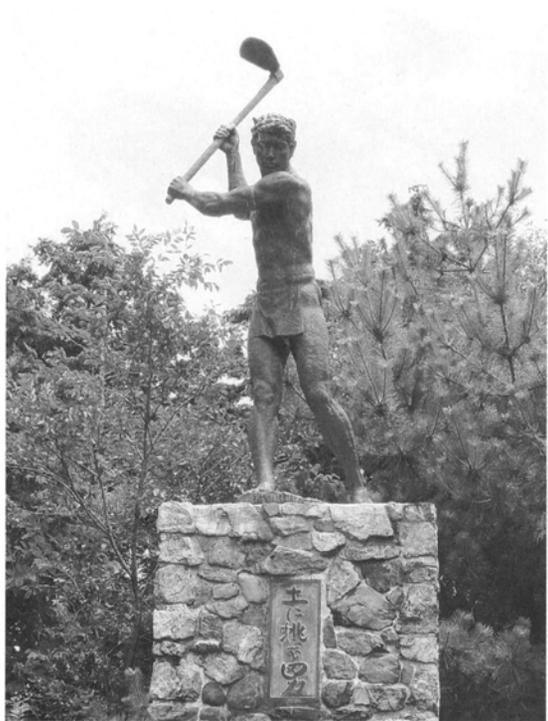
(9) 天伯原開拓 30 周年記念像

開拓30周年を記念し、昭和51年（1976年）1月10日に、天伯山神社の南端に建てられた。

力を合わせて苦しみを乗り越えて、荒野をきりひらいてきた開拓者の姿をあらわしている。

この像の礎石は、開拓者の郷土の石を持ち

よって造った。



天伯原開拓 30 周年記念像
(太田冒男作「土に挑む男」昭和51年1月10日建立)

(10) トレーニングセンター

市民の健康増進などを目的として、天伯校区の南側（豊栄町）に、豊橋市によってつくられた。開始は、昭和54年（1979年）5月15日である。

施設内には、バレーボールをはじめとするいろいろな競技コートがあり、トレーニング室には体をきたえるいろいろな器具がある。また、市民の研修会や集会の場としても利用されている。

(11) 資源化センター

年ごとに増えるごみの正しい処理と、その効果的な再利用をめざし、天伯校区の南側（豊栄町）に、豊橋市によってつくられた。操業開始は昭和55年（1980年）10月1日である。約4,500㎡の敷地の中に、焼却施設やリサイクルプラザなどがある。

平成14年度からは、高温燃焼することによってダイオキシンの発生を大幅におさえ、



資源化センター

金属類の回収や溶融スラグ（焼却後に残る鉍滓）の資源化など、環境に優しく、資源循環型の「熱分解・高温燃焼溶融炉」と呼ばれる最新のごみ処理施設が整備された。リサイクルプラザでは、各家庭でいらなくなったものをリサイクルし、有効利用している。リサイクルを体験することができる工房や情報コーナー、スラグによって描かれた絵なども展示してある。また、隣接する豊橋市資源リサイクルセンター（平成2年度稼働）では、市内各所に設置されたピンカンボックスに投入された資源ごみ、ペットボトル、プラスチックリサイクルセンター（平成17年度稼働）では、包装用器等を選別し再利用している。

正しい処理のために、平成15年（2003年）7月より7分別収集の体系を確立している。近くの温室団地は、資源化センターでゴミを燃やして得られる熱を利用して、いろいろな作物をつくっている。平成19年10月には、余熱利用施設（温水プール）もオープン予定である。

3 校区の活動

(1) 「八田平川」保護活動

天伯校区には校区の北を東西に流れる梅田川をはじめ、支流の八田平川、東高田川、坪口川、浜田川など大小多数の河川水路が流れ

ており、開拓時代は野菜の水洗いや洗濯場であったり、フナ・ドジョウなどを捕ったり、子供たちの水遊び場でもあった。

八田平川は梅田川水系に属し、天伯山を水源とする準用河川と天伯町字豊区域を水源とする普通河川と2つの支流から成り立ち、天伯小学校北の天伯町字八田平内で合流して梅田川に注いでいる。

生活環境の変化や川遊びが規制され、川に近づくことがたいへん少なくなり、川に対する地域の関心が薄れてきた。平成11年頃、天伯小学校の児童たちが、「川の動植物の実態をもっと知りたい。」と、小学校の裏を流れる八田平川を屋外学習の場としたことを契機に、「八田平川をいつまでもきれいにしよう。地域の環境を見つめ直そう。」との活動が始まった。

上流部と下流部の調査、川の深さや幅の測定や石の種類形状などの地形調査、魚・虫・亀など動植物の調査、水の速さや水温、透視度調査などが行われた。



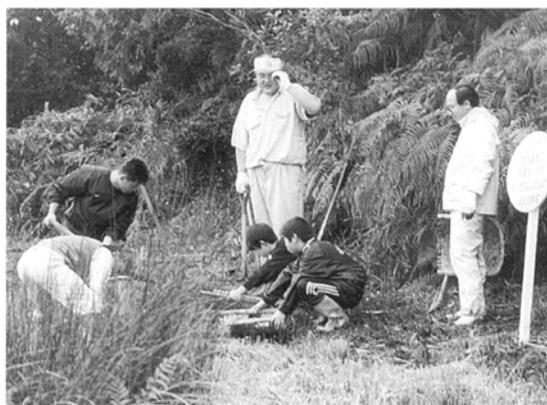
八田平川クリーン作戦

また、関心を持った児童たちが、自発的にゴミ拾いや水を汲んできて水質調査するなど年間を通した活動が、現在PTAや校区総代も参加する「八田平川保護活動」として大きく広がっている。また、市役所への「河川改良」陳情も行い、平成13年度から平成16年度にかけて、コンクリートの護岸を土や木や草

花のある護岸にし、川に親しめるようにする水辺リフレッシュ事業が行われた。さらに、平成15年度と平成17年度には柿の木沢池の流出水量を抑制する工事や水質浄化工事が行われ、池の周りも整備された。このようにだんだんときれいな状態を取り戻してきている。

(2)「天伯湿原」保護活動

天伯湿原は、標高約76m、面積約0.14ha、天伯山神社の湧水を水源とし、貴重なシラタマホシクサ・サギソウ・モウセンゴケ・ショウジョウバカマ・イヌノハナヒゲ・ミミカキグサなどの植物や、ハッチョウトンボ・シオヤトンボ・ベニシジミなどの昆虫など、葦毛湿原（豊橋市岩崎町）に似た植生を見ることができる。



天伯湿原保護作業

天伯原はもともとが荒地で、小さな湿原や清水があり、その湧き水は家の前を清らかな水音を立てて流れていた。しかし、開墾が進み、田畑や宅地が造成されるなどの影響で消滅し、今では天伯湿原を残すのみとなった。

天伯湿原の保護作業は、昭和50年頃から天伯山神社の役員が行っていたが、昭和56年に「自然を守ろう。天伯湿原の貴重な自然を残そう。」と、天伯小学校の児童や先生、PTAと一緒に保護作業を始めた。現在は、地元有志で天伯湿原保護の会をつくり、天伯小学校児童・先生・PTA・総代会等と一緒に、天伯湿原観察会を季節ごとに行う

とともに、堆積土砂の除去、木道の整備、ゴミ清掃、雑草の除去など持続的な保護活動を行っている。

(3) 天伯校区夏まつり

天伯校区最大の行事は、天伯校区夏まつりである。この夏まつりは昭和24年に初めて行われ、以来豊橋では唯一残った青年団が中心になって盆踊りを中心に行われてきた。平成10年より、小学校PTAや子供会などの各種団体が模擬店を企画・出店をするようになり、いっそう盛り上がるようになった。校区民が多数参集して盆踊りを楽しむとともに、校区民のコミュニケーションの場となっている。残念ながら青年団は平成16年をもって解散したが、天伯校区夏まつりは総代会に受け継がれ、平成18年はとよはし100祭にちなんで、天伯名産のスイカの抽選会という催しも行った。地域住民の結束を図る校区最大のイベントを今後も盛り上げ、天伯校区の発展の象徴として、今後さらに盛大に行われることが期待される。



夏まつり



スイカ抽選会

天伯校区の歴史

- 明治末期 天伯3戸
- 大正3年 12戸 天伯神社（秋葉神社）大正時代創建
- 昭和13年 18戸
- 昭和20年 23戸
- 昭和20年 天伯原に初の入植（入植 219戸、定着94戸、その後39年まで入植300戸、定着170戸）
- 昭和21年 天伯開拓団結成（東高田町内会）
- 昭和22年 栄開拓団入植（22～24年入植49戸、定着43戸、25～33年入植17戸、定着16戸、計入植66戸、定着59戸）
- 昭和23年 1月10日栄就農組合結成、3月17日天伯原開拓農協設立 一部に電灯がつく。
- 昭和25年 1月8日豊橋市立高師小学校天伯分校開校、9月18日分校と農協に電話甲乙にて開設
天伯山神社創建（旧陸軍病院の神社を移築、出雲大社分神）
- 昭和26年 10月伊豆栄神社創建（長野県下伊那郡阿南町新野伊豆神社分神）
- 昭和27年 7月勢徳寺移築（蒲郡市相楽町より） 大部分の家に電灯がつく。
- 昭和28年 9月25日13号台風（全壊35戸、半壊56戸、大破62戸）
- 昭和29年 6月託児所開所（勢徳寺にて30～40名）
- 昭和30年 4月1日豊橋市立天伯小学校開校（児童192名、教員7名）
- 昭和34年 9月26日伊勢湾台風
- 昭和35年 4月南高田町水道工事着工（43年東高田町水道と結ぶ）
- 昭和38年 4月天伯保育園開園（約60名） 県道東七根藤並線舗装
- 昭和41年 7月1日豊橋市開拓農協合併
- 昭和42年 豊川用水一部通水 県道小松原松山線舗装
- 昭和43年 豊川用水通水
- 昭和45年 8月1日豊橋子ども自然公園開園
- 昭和46年 天伯団地造成工事着工 分譲1次48年66戸 2次49年60戸 3次49年56戸
4次50～51年107戸 5次51～53年13戸 計302戸
- 昭和50年 11月天伯山神社御遷宮（境内26,813㎡ 建物76.74㎡）
- 昭和51年 4月天伯保育園移転新築 10月豊橋技術科学大学開学 学生 工学部720名
職員372名 学院600名 敷地355,706㎡
- 昭和54年 伊豆栄神社御遷宮 5月18日豊橋市トレーニングセンター完成
- 昭和55年 4月1日豊橋市資源化センター活動開始 10月開拓記念会館竣工
- 昭和56年 天伯湿原整備開始
- 昭和57年 9月28日天伯校区市民館起工式
- 平成4年 豊橋総合動植物公園開園
- 平成7年 天伯原開拓50周年
- 平成16年 11月21日豊橋市立天伯小学校開校50周年記念式典
- 平成18年 10月10日豊橋市立天伯小学校新校門お披露目式

写真で見る天伯 (平成 18 年度)

現在の天伯小学校



敬老会



防災訓練



バレーボール大会

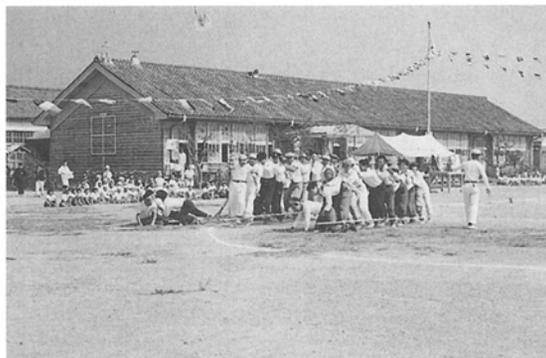


ソフトボール大会



運動会・階梯操法 (消防団)

昔の運動会



昭和33年頃



昭和33年頃



昭和56年



昭和56年



昭和58年頃



昭和57年



昭和58年

天伯団地造成前後

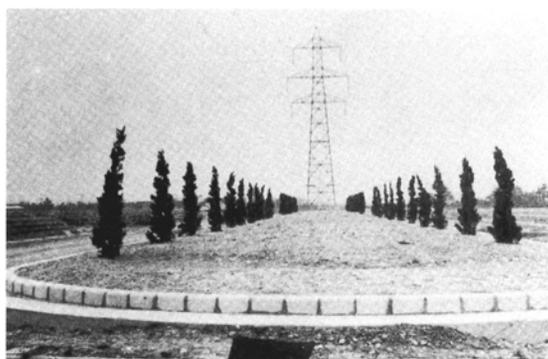


団地造成前の高田山



団地造成工事 1

団地造成工事 2



整備される道路



家が建ちつつある団地



天伯団地線の開通

開拓黎明期



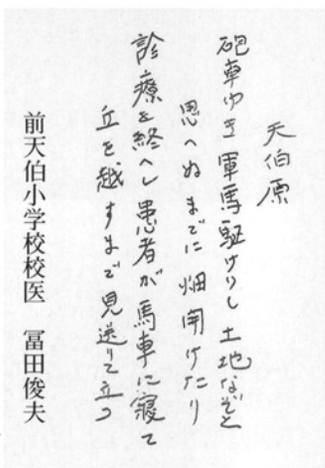
天伯原の開拓地



ソバの花咲く開拓地



国立病院医師団の診療風景



元国立病院 富田医師の句
前天伯小学校校医 富田俊夫



東沢農場苦難の暁



昭和 25 年当時の栄集団部落



天伯分校と組合事務所を望む



託児所開設当時の集合写真（昭和 29 年）

編集後記

「鬼の天伯、地獄の高師、流す涙が梅田川」と兵士に唄われたかつての軍演習地に私たちは住んでいます。編集の過程で、ここを開拓し発展させてこられた方々の苦難、人間の強さ、助け合う人々の優しさなどに触れ、大変勇気付けられるとともに熱い感動を覚えました。当時を経験された方々の言葉に接することが出来、本当に良かったと思います。

現在の天伯に住む住民の多くはそうした体験や歴史とは関係ない人がほとんどで、全く新しい地域となっていると思っている方が多いのかも知れません。しかし、改めて校区史を読んでみると、これらと無縁であってはならないことに気づかされます。先人の智慧や経験が何かにつけ現在も私達の道標となっているような気がするからです。

私たちが自らの故郷として誇りを持って天伯を語り、そして一層愛していくためには、校区の生い立ちを知ることも必要なことではないでしょうか。本校区史がその一助となれば幸甚です。

編集委員

今井忠夫 武藤滋治 水鳥正美 本田竜一
金山紘記 伊藤耕三 鈴木拓朗 後藤由紀
中田勝雄 林 昌宏 鳥山昌男 村松一成
上田恵美乃 芳賀美代子 仲平優佳
深見正彦 伊藤嘉邦

参考文献

郷土史 天伯 豊橋市立天伯小学校
天伯原 天伯原開拓 50 周年記念
誌刊行委員会
地方都市の研究—新しい豊橋— 伊藤郷平
日本の地名大辞典 4 中部 渡部 光
日本地誌 12 愛知県・岐阜県
日本地誌研究所

愛知県開拓史 愛知県開拓史研究会
豊橋市史 豊橋市史編集委員会
東三河の地学アルバム 愛知県東部地質研究会
豊橋地学めぐり 豊橋地学同好会
牧野日本植物図鑑 牧野富太郎
初夏の野外植物 堀 勝
東海地方の食虫植物の形態 小池常雄
渥美半島の昆虫 東三河アマチュア昆虫研究グループ
葦毛の野鳥 豊橋市立豊岡中学校
東海の昆虫 安藤 尚・岡田正哉・横地鋭典
のうぜんの花 長屋重明
歩兵第十八聯隊史 兵東政夫
創立記念誌別冊 長屋重明
豊橋市制要覧 豊橋市役所総務部行政課統計係
わたしたちの豊橋 1・2・3 豊橋市中学校社会科研究部
とよはし 豊橋市小学校社会科研究部
ふたがわ 豊橋市立二川小学校
郷土 したら 設楽町教育委員会
市町村沿革史—愛知の百年— 愛知県市長会・町村長会
開拓地の子供たち 小学生・中学生の作文集
統計季報No.63 豊橋市役所総務部行政課

校区のあゆみ 天伯

平成18年12月25日発行

編集 天伯校区総代会
天伯校区史編集委員会
発行 豊橋市総代会
印刷 共和印刷株式会社

R2100
自然紙配合率100%の再生紙を使用しています。

PRINTED WITH
SOY INK

